

スポーツと女性の解放：

米国女子テニス界と多様性の問題

アリシア・ギブソン、ビリー・ジーン・キング、ウィリアムズ姉妹
にみる米国社会

アメリカ人文科学研究会 4年 白井美帆

目次

はじめに	3
第1章 アメリカ社会とスポーツ	4
第1節 アメリカ社会とスポーツの強固な結びつき	4
第2節 スポーツとジェンダー	6
第2章 アリシア・ギブソン (ALTHEA GIBSON)	8
第1節 はじめに：「女子テニス界のジャッキー・ロビンソン」としての苦悩	8
第2節 時代背景	9
第3節 黒人とテニス	10
第4節 生い立ち	10
第5節 ギブソンの功績と期待	11
第6節 人種差別：ギブソンの葛藤	13
第7節 結語	15
第3章 ビリー・ジーン・キング (BILLIE JEAN KING)	17
第1節 はじめに：もう一人の「キング」	17
第2節 時代背景	18
第3節 テニスとフェミニズム	19
第4節 生い立ち	20
第5節 キングの対男性軸における功績：「男女の戦い」	20
第6節 男女の二項対立を超えて：同性愛者としてのキング	22
第7節 結語	24
第4章 ウィリアムズ姉妹 (WILLIAMS SISTERS)	26
第1節 はじめに：	26
第2節 時代背景	27
第3節 ブラックフェミニズムのシンボリック的存在	28
第4節 生い立ち	29
第5節 人種・ジェンダー・ビジネスにおける功績	30
第6節 ウィリアムズ姉妹の直面した二重の差別	31
第7節 結語	35
おわりに	37
参考文献	39

はじめに

1973年、ビリー・ジーン・キング（Billie Jean King, 1943～）が当時55歳の男性選手ボビー・リッグス（Bobby Riggs, 1918～1995）を「Battle of the sexes（男女決戦）」で打ち負かした時、彼女が全米、或いは世界に与えた激震は図り知れない。スポーツは従来、「男性のもの」と捉えられ、女性アスリートの存在は、不可視されたり、周縁化されたりすることも多かったからだ。そんな中でも、スポーツの特性、加えて類稀なる身体能力と機会で女子テニス選手として活躍を収めていたのがキングだった。彼女は、圧倒的な実力で成功を収めるに伴い、政治的な側面でも男女平等と機会平等を求めるなどその影響力を少しずつ拡大していた。1972年に教育における男女平等を定める「タイトル・ナイン」が制定されるなど行政側の動きもあったが、アメリカ社会の女性スポーツに対する視線には未だ厳しいものがあつた。そんな中、「女子は競技水準が低いから賞金額も低くて当然だ」と主張し、キングを挑発したのが、25歳年長リッグスだった。

アメリカ社会は歴史的にスポーツと強い繋がりを持ってきた。そして、「男女の決戦」でもそれは例外ではなかった。試合会場には、3万472人の観客が女と男の一騎打ちを見ようと押し寄せ、中継が行われたアメリカ国外の15カ国の人々も含む、5000万人以上がテレビで観戦した。キングが勝利を収めた時、アメリカや世界中の人々はこれからの女性とスポーツを巡る環境や状況に変化が訪れることを感じたのではないだろうか。人々の価値観にも大きな影響を与えたはずである。

このように、アメリカ社会はスポーツと強い繋がりを持つため、そこでの出来事は、社会全体の価値観や制度状況に大きな影響を与える。その一方で、例えば、キングの時代、男女で賞金額に約10倍の差が存在したように、スポーツは、社会に既に存在する差別的な価値観や制度の存在が表出される場でもあるのである。そして、特に人種差別の文脈において、それは時に潜在的な不平等や差別を明確に明るみに出してしまうという残酷さも孕んでいるのである。

前述したように、スポーツは女性が参加する機会を制限することによって、伝統的に女性を抑圧してきた側面もある。マライア・ネルソンはこの主張を的確に補強している。¹ 「私たちは、バッティング、キャッチボール、投げること、ジャンプすることは、中立的で人間的な活動ではなく、もっと本質的に男性の領域であることを学んだ。狡猾なことに、私たちの文化は男性のプロスポーツを崇拜し、女性のスポーツの成果については沈黙

¹ Carty, Victoria. "Textual Portrayals of Female Athletes: Liberation or Nuanced Forms of Patriarchy?" *Frontiers: A Journal of Women Studies*, vol. 26, no. 2, 2005. P.132.

を守ってきた。」²

そこで本研究は、キングに加えて、アリシア・ギブソン (Althea Gibson)、及びウィリアムズ姉妹 (Venus Williams と Serena Williams) の人生とその周辺環境の分析を通じて、テニスにおいては、特権階級を歴史的に構成してきた「中産階級もしくは上層階級の白人男性」に当てはまらない女性や非白人が虐げられるという、アメリカ社会の格差と差別の現実を突きつけつつも、これらのマイノリティが躍進することで社会の多様性推進を牽引する役割を果たしてきたことについて論じる。テニスを具体的に扱いながらも、より一般的にアメリカ社会において重要な役割を果たしてきたジェンダー、人種、階級の問題とスポーツや法律の関係性を広く論じる。スポーツのアメリカ社会における役割は両義的であり、それを通してアメリカ社会が変わることもあれば、それが潜在的に社会に潜んでいる差別や格差を鏡のように映し出してしまうということもあるのだ。

第1章 アメリカ社会とスポーツ

第1節 アメリカ社会とスポーツの強固な結びつき

アメリカ社会とスポーツは密接に結びついている。民主主義、資本主義、文化的独立、人為的集合統合といったこの国の課題の中核部分にスポーツは深く関わってきた。例えば、「公民権運動」において、アメリカ社会とスポーツの強固な繋がりが確認できる。

1947年、ジャッキー・ロビンソン (Jack Roosevelt Robinson, 1919～1972) は、白人と黒人が別のリーグでプレーしていた時代に、白人メジャーリーグのブルックリン・ドジャースでプレーし、黒人初のメジャーリーガーとして歴史に名を刻んだ。彼は、相手チームや観客からの嫌がらせに耐えながら二塁手として活躍し、新人王に輝いた。彼の成功を皮切りに、大リーグは黒人選手に門戸を開き、アメリカ社会におけるジムクロウ廃絶に向けて風穴を開けた。これは当時のアメリカにおける人種差別との闘いにおける象徴的な出来事であった。7年後の1954年、連邦最高裁判決 (ブラウン対教育委員会判決) において、公立学校における人種隔離が違憲とされたように、彼の成功は、公民権運動の原動力となった。

実際に、公民権運動の戦術と比較すると、大リーグの人種隔離撤廃の持つ意味は大きい。黒人たちは、公立学校での人種隔離が教育効果における著しい不平等を招いていることを根拠に、1896年の最高裁判決による「分離すれども平等」というジムクロウの論理に挑戦

² Nelson, Mariah. "The Stronger Women Get, The More Men Love Football: Sexism and the American Culture of Sports." Harcourt Brace & Company, 1994. P. 124-125.

した。そして、学校が分離されていること自体が黒人生徒に劣等感を与えている証拠を裁判で提示することで違憲判決（1954年のブラウン判決）を導き出すことに成功したが、教育現場での人種統合に対してはその後も各地で白人側の根強い抵抗が続いた。一方、ロビンソンの事例は、白人側が黒人の能力を認め、自発的に差別を撤廃したことを意味している。それは、アメリカ型競技の能力主義が体現しようとしてきた民主的な精神が、ようやく現実社会を動かした瞬間でもあった。³

ところで、アメリカにおけるスポーツでは、能力主義の精神が強い。鈴木透が指摘しているように、歴史的に産業社会の基本原則との親和性が強いスポーツシステムが形成されたため、分業化・専門化が進み、野球やアメリカンフットボール、バスケットボールで見られるように、ポジションが細分化される傾向にあるのだ。⁴それは、状況に応じて最適な人材を投入するというメンバーチェンジの発想とも相性がよく、より多くの人々がゲームに参加できる点では民主主義と、より成果が最大化できる点では資本主義の精神とも軌を一にする。また、特殊な専門的技能の重視は、能力主義や成果主義を強化する。つまり、選手の価値は、あくまでその人の能力という物差しに一元化される。逆に言えば、能力のある選手が試合に出られない、ましてチームにさえ入ることができないとすれば、それはこのシステムと根本的に矛盾する。だからこそ、野球は、アメリカのスポーツが奨励する能力主義によって人種の壁を打ち破れる可能性が最も高かったのである。⁵

このように、アメリカにおけるスポーツは、その能力主義的な精神ゆえに、実力さえあれば差別の壁を乗り越えられる可能性を有しているのである。そして、マイノリティ選手たちは、人種、性別、階級、民族、地域などの垣根を超えて共感を呼び起こし、マジョリティ側に自発的な変化を促せる可能性を有する点において、時に政治的な側面からの働き掛けよりも社会的な変化を促進する場として機能する。ロビンソンの活躍は、アメリカのスポーツが民主化と人為的集団統合を深化させ、スポーツと社会形成とがこの国でより緊密に結びついていく契機ともなった。したがって、アメリカ社会とスポーツの密接な結びつきは、社会変革の舞台となりうるのであり、ここにおいて、ロビンソンの後の時代に、女子テニス選手が果たした役割の検討は、アメリカ社会のジェンダー、人種の分野における更なる変革を辿ることに繋がるのである。

³ 鈴木透『スポーツ国家アメリカ 民主主義と巨大ビジネスのはざままで』中公新書, 2018, p.92.

⁴ 鈴木・前掲注3) p.93.

⁵ 鈴木・前掲注3) p.93-94.

第2節 スポーツとジェンダー

鈴木らの先行研究が示す通り、スポーツの世界において、女性は長らく差別と偏見に晒されてきた。その背景には、男性と一緒に競技することがそもそも想定されていなかったため、女性競技が仮に認められるにしても、そこには男性の競技との上下関係が作られやすいことがあった。加えて、女性のスポーツへの参加は、公衆の面前で女性の身体の露出度が上がるという側面もはらんでいる。ここにおいて、女子がスポーツをすることは、服装や性道徳の規範に挑戦するという面を持っていただけでなく、それが新たな搾取の契機ともなりかねなかった。したがって、スポーツを通じて女性が男性と対等な地位を獲得するためには、女性がスポーツに参加する権利を社会に認めさせ、女性の競技水準を見下す態度や女性スポーツを見世物扱いする風潮を打破しなくてはならなかったのである。⁶

1870年以前の米国では、女性のための活動は本質的にスポーツに特化したものではなく、娯楽的で身体活動を重視したものであり、非公式でルールもなかった。1800年代後半から1900年代初頭にかけて、女性たちは運動的なクラブを結成し始めたが、女性が競技スポーツへの関与を強めるにつれて、女性のスポーツ活動を制限する取り組みが続いた。⁷

スポーツとジェンダーの文脈において重要なのは、テニスが19世紀後半から女性に屋外で許されたごく限られた種目の一つであったことである。テニスはそもそも、一部の白人上流階級の競技で、あまり身体を露出する必要がなく、接触プレーもなかったため、健康増進を目的に、ゴルフや自転車と並んで許された。そのため、歴史が長く、知名度も高く、大きな大会も多い。したがって、女性とスポーツの歴史・変遷を研究する上で検討すべきスポーツなのである。一方で、白人上流階級の競技色が強いことも考慮すべきである。したがって、スポーツが黒人選手に開かれていった変遷を検討する上で、テニスの歴史は検討に値するのである。

タイトル・ナイン

1972年制定の「タイトル・ナイン」は、連邦政府から財政的援助を受ける教育機関において、性による差別を禁止した教育の機会均等法であり、「合衆国に住むいかなる人も、単に性が違うという理由のみで、政府から財政的援助を受けている教育プログラムや活動において参加を拒否されたり、利益を否定されたりあるいは差別にさらされることはな

⁶ 鈴木・前掲注3) p.98.

⁷ Richard C. Bell, *A History of Women in Sport Prior to Title IX*, *The Sports Journal*.
<https://thesportjournal.org/article/a-history-of-women-in-sport-prior-to-title-ix/>

い」と定められている。これは、合衆国 50 州の教育全般に関わる規定（連邦法規）であるが、特に体育やスポーツの分野は、男女の性の違いにより問題が表面化しやすいため、体育・スポーツの男女平等を保障するための重要な法律となった。施行当時の教育現場では十分な理解がされていたとは言えず、教員も生徒も少なからず混乱したようだが、ここにおける法規の変更は後に実態を伴わせる非常に有意義なものだった。⁸

1972 年にタイトル・ナインが施行されて以来、女性や女兒のスポーツやフィットネスへの参加は、社会的支援の広がりとともに劇的に増加した。⁹大学を含む連邦政府から資金提供を受ける全てのプログラムにおいて、性別に基づく差別を禁じることで、1972 年から約 50 年で、大学アスリートに占める女性の割合は 30%上昇した。¹⁰女性アスリートは、フィギュアスケート、体操、テニスといったステレオタイプな女性専用スポーツからの脱却も果たした。¹¹現在では、女子もサッカー、ラグビー、アイスホッケー、そしてレスリングやボクシングもプレーしている。¹²この文言は、37 語と短いながらも、アメリカの教育機関における女性スポーツを語る上で欠かせない歴史となったのである。

⁸ 井上洋一『TitleIX が支えるスポーツの男女平等機会』体育史研究第 24 号, 2007, p.103.

⁹ Wilson Sporting Goods Company and the Women's Sports Foundation, "The Willison Report: Men, Dads, Daughters and Sports." Women's Sports Foundation, 1988.

¹⁰ Stephanie Livaudais, *50 years of Title IX: From Billie Jean King to Naomi Osaka, here's how the tennis world is celebrating*, Tennis (2022), <https://www.tennis.com/baseline/articles/50-years-of-title-ix-from-billie-jean-king-to-naomi-osaka-here-s-how-the-tennis> (accessed January 16, 2024)

¹¹ Cahn, Susan. "Coming on Strong: Gender and Sexuality in Twentieth-Century Women's Sports." Free Press, 1994.

¹² Carty. P.132.

第2章 アリシア・ギブソン (Althea Gibson)

「女子テニス界のジャッキー・ロビンソン」としての苦悩

第1節 はじめに：「女子テニス界のジャッキー・ロビンソン」としての苦悩

私は意識的に特別な大義のために太鼓をたたくようなことはしません。アメリカにおける黒人の大義でさえも。私たちが前進する最善のチャンスは、個人として自分自身を証明することだと感じているからです。

アリシア・ギブソン、*I Always Wanted to Be Somebody* (1958)¹³

人種差別が色濃く残る 1950 年代、アリシア・ギブソン (Althea Gibson, 1927~2003) は言葉ではなく、ラケットで人種とジェンダーの壁に立ち向かった。¹⁴ギブソンは、南部出身でニューヨークの貧しい地域育ちだが、全仏、ウィンブルドン、US ナショナルズ (US オープンの前身) の全てで優勝し、テニス界の頂点に立った。シングルスで 5 回、ダブルスで 5 回、混合ダブルスで 1 回、合計 11 回のグランドスラムタイトルを獲得するという快挙を成し遂げている。

アメリカで公民権運動が本格的に始まる前、競技場やコートはたしかに人種の壁を打ち破るフロンティアとなりつつあった。しかし、全米の多くを悩ませていた差別的な政策や感情は、アフリカ系アメリカ人の一流アスリートたちに障害をもたらした。特に、エリートで裕福な白人の歴史が長いスポーツとして知られるテニスでは、それが顕著だった。¹⁵ 社会に根強く残る人種差別の実情を目の当たりにしたギブソンは、偉業を達成し、社会に影響を与えうる地位を獲得したものの、世間から期待され、伝説的な黒人男性野球選手と比較され、「女子テニス界のジャッキー・ロビンソン」とも呼ばれたが、人種を代表するスポークスパーソンとしての重すぎる役割を拒んでもいる。実際、人種差別に直面したキャリアについて、「楽しいことよりも辛いこと、嬉しいことよりも悲しいことの方が多かった」と悲痛な回想している。¹⁶

その一方で、彼女の類稀なる運動能力により打ち出された実績と敵対的な環境に身を投じる意欲は、その後のアフリカ系アメリカ人アスリートのための機会を作り出した。本章

¹³ Althea Gibson, *I Always Wanted to Be Somebody*, Harpercollins, 1958.

¹⁴ Stanmyre. P.6.

¹⁵ Stanmyre, Jackie F. *Althea Gibson and Arthur Ashe: Breaking down Tennis's Color Barrier*. Cavendish Square, 2016. P.4

¹⁶ Gibson.

では、人種差別が根強く蔓延る社会において黒人女子テニス選手として活躍したギブソンが、後世の多様性促進に貢献した役割と当時のアメリカ社会の現実を検討する。



Photo: Hulton Archive/Getty Images

第2節 時代背景

スポーツの世界において、人種差別は、黒人選手が白人選手の参加する大会に参加できないなど、時間や場所において、白人選手と黒人選手のプレーが区別される形で表出していた。¹⁷ギブソンが生きた 1900 年代のアメリカは人種差別が根強く蔓延る社会だった。1896 年の Plessy v. Ferguson 事件において連邦最高裁判所が、「分離されているが平等」な宿泊施設を支持する判決を下したことは、南部全域のジム・クロウの条例や法律に連邦政府を正当化した。そして、1890 年にルイジアナ州で可決されたジム・クロウ法は、「別個の鉄道車両」を生み出しただけでなく、アフリカ系アメリカ人による州対抗トーナメントをも創設した。その後の 100 年間、そしてそれ以降も、一連の私的な決定と制度的慣行の中で白人により意図的に制定された法律は、ギブソンのような黒人テニスプレイヤーがなんとか生き抜かねばならない人種差別的な世界を作り出した。¹⁸

¹⁷ ジョージ・H・セージ、深澤宏訳『アメリカスポーツと社会：批判的洞察』不味堂出版、1997、p.74.

¹⁸ Destin, Yven, and Ervin Dyer, *The Legacies of Tennis Champions Althea Gibson, Arthur Ashe, and the Williams Sisters Show the Persistence of America's Race Obstacles, Race and Social Problems* (2021), vol. 13, May 2021, pp. 195–204, doi:<https://doi.org/10.1007/s12552-021-09334-3>.

第3節 黒人とテニス

19世紀初頭、スポーツ選手の理想像といえば、白人のアングロサクソンだった。テニス界においても、それは同様であり、第二次世界大戦まで、アメリカのテニスは、ほぼ完全に人種別に分離されていた。

そもそも、アフリカ系アメリカ人がテニスをするようになったのは、小規模ながら黒人の中産階級が存在するようになってからのことである。2000年のインタビューで、黒人のテニスコーチ、ブランチ・カリントンはこう回想している。「テニスは常に金持ちの男たちのスポーツだと思われていました。テニスは例外なく会員制のカントリークラブ経由で広まったのです。最初にテニスを始めた黒人のほとんどは教師で、または少数の医師がいたかもしれません。裕福な黒人家庭は自宅の裏庭にテニスコートを作りました。いわゆるエリートの黒人たちがテニスと親しんだのは、社交に必要なからです。テニスをする人々は労働者階級のことなど気にもかけず、社交の場でもなければ誰かをテニスで助けようなどとは思わなかったのです。」¹⁹

それでも、1880年代に、伝統的黒人大学（HBCU）がイギリスのスポーツを導入し始めて以来、黒人はテニスというスポーツに関心を持つようになった。しかし、このスポーツもジム・クロウ法の支配下に置かれるようになり、白人のトーナメント大会から黒人のテニスプレイヤーは正式に締め出されるようになった。そんな中でも、ワシントン D.C.とメリーランド州ボルチモアの黒人テニスクラブは、アメリカ史上最古の黒人スポーツ組織であるアメリカン・テニス・アソシエーションを構想した。

第4節 生い立ち

1927年、サウスカロライナ州で綿花小作人の娘として生まれたギブソンは、2才の時、ニューヨークの低所得者がすむコミュニティに落ち着いた。彼女はハーレムのストリートでプレーされていたパドルテニスですぐに頭角を表し、1939年、12才でニューヨーク市の女子パドルテニス・チャンピオンになった。このような中で、ギブソンは、人種的な理由で白人会員たちのクラブには入れず、黒人エリートにより設立された有名なテニスクラブの注目を集めた。²⁰黒人エリートたちは、テニス界で米国のカラーラインを打ち破るアフリカ系アメリカ人を育てることに関心を寄せていたため、ギブソンは最高の有望株だった。

¹⁹ エリザベス・ウィルソン「ラブ・ゲーム テニスの歴史」白水社、2016、p.210.

²⁰ Yven and Dyer, p.196.

一方で、テニスは大学生から広まったスポーツであったため、自然と社会的地位の指標となり、清楚で教養があり、社交的な振る舞いを見せる白人と同じ、「黒人ブルジョワジー」を象徴するスポーツとなった。ギブソンは適切な教育と階級的背景を欠いていたが、高い運動能力を有していたため、クラブの指導者やコーチは彼女にテニスの社交儀礼を教え、トレーニングも始めた。

黒人のエリート層の注目もあり、ギブソンはアメリカ南部へ行き、ノースカロライナではイトンのもとで、ヴァージニアではジョンソンのもとでトレーニングを受け、アメリカ最高の黒人選手たちとプレーした。ギブソンは自分を気にかけてくれる人たちを見つけ、自信と基盤を築いた。彼女は「人種を理由に一緒に暮らすことを余儀なくされた集団から生まれる親密さ」から恩恵を受けたのである。²¹ギブソンは、黒人のコミュニティ、特に黒人エリートによる支援・サポートを受け、結果を出したのだ。この時代、一個人として、独力のみで人種差別に立ち向かうことは不可能だったとも言える。

第5節 ギブソンの功績と期待

前述の通り、ジャッキー・ロビンソンの時代、白人と黒人で野球のリーグが分けられていたが、黒人が白人リーグから排除されていたことはテニス界でも同様であった。当時のアメリカのテニス界では、全米大会へ出場するためにポイントを積み重ねる必要のある公認ツアー大会は、白人だけのクラブで開催されていた。つまり、全米テニス協会

(USTA)には黒人を禁止する明文化された規則はなかったものの、実質的には、黒人には全米大会への出場権利がなかったのである。そのため、ジム・クロウ法の規制を突破するまでに、ギブソンはATA ニューヨーク州選手権（1941年）、ATA 全米女子優勝

（1944年と1945年）、ATA 全米女子10連覇（1947年から1956年）など、黒人の、黒人による、黒人のためのテニス界で優勝記録を積み重ねた。

しかし、このようなギブソンの実績にもかかわらず、全米大会に招待されるには、白人の元チャンピオンからの後方射撃が必要だった。当時、既に引退していた白人選手アリス・マーブル（Alice Marble: 1913-1990）が1950年に人種隔離と偏見に公然と異議を唱え、肌の色を理由にギブソンを拒否するのは馬鹿げていると書いたのだ。²²この白人選手からの異議申し立てのおかげで、ギブソンは黒人として初めてテニスのメジャー大会に出

²¹ Bates, Karen Grigsby. “Nostalgia For What’s Been Lost Since ‘Brown V. Board.’” *Code Switch*, NPR, 17 May 2014, <https://www.npr.org/sections/codeswitch/2014/05/14/312555307/nostalgia-for-whats-been-lost-since-brown-v-board>.

²² Marbel, Alice. “A Vital Issue.” *American Lawn Tennis Magazine*. 1 July 1950.

場でき、スタジアムには約 2,000 人が詰めかけた。ゲートの外では、「ニガーをやっつけろ」と叫ぶ者もいたが、ギブソンの堂々とした優雅なプレースタイルは当時の人々の印象に残った。²³

そして、1956 年、ギブソンは、テニス版の公民権運動を実践するに至る。彼女は国際テニス界のカラーラインを越え、アフリカ系アメリカ人として初めてグランドスラム・タイトルである全仏選手権で優勝するという金字塔を打ち立てたのである。翌年にはウィンブルドンと US ナショナルズ (US オープンの前身) の両方で優勝し、テニス界の頂点に立った。1958 年にもこの 2 冠を達成。シングルスで 5 回、ダブルスで 5 回、混合ダブルスで 1 回、合計 11 回のグランドスラムタイトルを獲得するという功績を残した。²⁴

1957 年、29 才でウィンブルドンでの優勝を果たした時、彼女はエリザベス女王に会い、ニューヨークでパレードを行い、ブロードウェイの「英雄たちの谷 (Canyon of Heroes)」を下りながら、「チャンピオンの世界のチャンピオン」として何千人もの人々に迎えられた。また、全米チャンピオンとなった際には、スタンディングオベーションを浴び、リチャード・ニクソン副大統領からトロフィーも授与された。彼女は「ハーレムの女王」と称えられ、アフリカ系アメリカ人たちのあこがれともなった。²⁵

当時のアメリカ社会では、公民権運動が勢いに乗っていた。1954 年にはブラウン対教育委員会判決、そして 1956 年にはモンゴメリー・バス・ボイコットでの勝利など、その動きは活発となっていた。そして、スポーツの側面から公民権運動に大きな影響を与えたジャッキー・ロビンソンは、「黒人アスリートは、フィールドやコートでの偉業によって与えられた発言権、プラットフォームを、それを持たない人々のために発言する責任を負わなければならない ("given a voice, given the platform provided by their feats on the field or the court" the Black athlete must "take on the responsibility of speaking dor those who don't have that platform")」²⁶という言葉を残している。

ギブソンには、「女性のジャッキー・ロビンソン」として、当然のように人種的状况の変化について語ることへの期待があった。しかしながら、彼女にとって人種を代表するこ

²³ Yven and Dyer, p.197.

²⁴ Yven Sestin, Ervin Dyer "The Legacies of Tennis Champions Althea Gibson, Arthur Ashe, and the Williams Sisters Show the Persistence of America's Race Obstacles"(May 2021) p.197.

²⁵ Ibid.

²⁶ Vognar, Chris. "When Star Black Athletes Consider It Their Duty to Speak up for Social Justice." *Dallas News*, 1 June 2018, www.dallasnews.com/opinion/commentary/2018/06/01/when-star-black-athletes-consider-it-their-duty-to-speak-up-for-social-justice/.

とは重すぎる重圧であった。目覚ましい功績はギブソンに発言権を与えたが、それは彼女にとって歓迎すべき役割ではなかったのだ。発言しうる権威、社会的地位にはあったが、「黒人」であり「女性」という 2 つのフィルターによりギブソンが受けるあまりの社会的圧力は、彼女がロビンソンのように人種差別に真っ向から対峙することをより困難にさせたのである。

第6節 人種差別：ギブソンの葛藤

ギブソンは、テニス選手として功績を残すに伴い、人種差別に関する社会の現実を突きつけられた。まず、ギブソンのこれほどの功績とは裏腹に、アメリカ社会はまだ黒人を対等な存在として見ておらず、彼女の周辺でも人種差別はあまりにも深刻であった。テニスのトレーニングのために南部にいったギブソンは、テニス選手としての邁進を進めるにあたり、そのキャリアの当初から人種的に分断された世界という現実を強く突きつけられた。南部に行くことは、アメリカのアパルトヘイトのシステムに深く入り込むことであり、ここにおいて彼女は南部の風習の遵守を強いられた。彼女はバスの後部座席に座り、「ニガー」と迫害されることにも耐えなければならなかった。²⁷

当時、南部で活躍した黒人選手たちは、休憩所で白人の観客や白人から反感をかったり暴力を受けたりしないよう、人種差別に直面しても反撃しないよう指導された。ギブソンのコーチであるイトンとジョンソンは、白人のテニス界に入る準備として、ギブソンにテニスの技術だけでなく、白人社会の礼儀作法に沿ったエチケットを教え、黒人に対する否定的なステレオタイプを払拭することの重要性を認識していた。彼らは、ギブソンが人種を代表しているのだから、最高の振る舞いをしなければならないと考えており、コートの上では、審判に不服を申し立てることなく、礼儀正しくある必要があると指導した。²⁸つまり、ギブソンのコーチたちは、いわゆる「リスペクタビリティ・ポリティクス (Respectability Politics)」を守るように彼女をトレーニングしたということができる。「リスペクタビリティ・ポリティクス」とは、疎外されたコミュニティのメンバーが、文化的、及び政治的アイデンティティの物議を醸す側面を隠し、社会の主流派に同化することで、社会的流動性を達成しようとするプロセスであり、尊厳を得る方法として意識的に選択された政治戦略を指す。ここにおいて、非白人が特定の「適切な行動」をおこなうと、その見返りとして白人が支配する社会における条件付きの尊敬、認知、平等が得ら

²⁷ Yven p.196.

²⁸ Yven p.196-197.

れ、それにより人種差別が改善、または克服されるという考えである。²⁹

例えば、ロビンソンは、能力主義の精神が強いアメリカの野球界でも、黒人選手の実力を素直に受け入れるには長らく抵抗があった時代において、偏見を和らげるために、優等生を演じていた。能力だけではなく、白人に好感を持ってもらわなければ、人種の壁が再び立ち上がりかねなかったからだ。同様に、史上2人目の黒人のボクシング世界ヘビー級王者になったジョー・ルイス (Joe Louis, 1914~1981) や、アメリカン・フットボールで殿堂入りした O.J. シンプソン (Orenthal James Simpson, 1947~)、バスケットボールで殿堂入りしたマイケル・ジョーダン (Michael Jordan, 1963~) なども、リスペクタビリティ・ポリティックスを実践したと言えるだろう。ただし、リスペクタビリティを守るという行為は、前提として、白人優位を黒人が認めている状況であり、支配されるもの、受け入れてもらうものとして、黒人が自身を捉えていることの証左でもある。

もちろん、このような中産階級的の同化主義に挑戦したアスリートもいた。プロボクサーとして初のヘビー級王者となったジャック・ジョンソン (Jack Johnson, 1878~1946) や、同じくボクシング選手で元 WBA・WBC 世界ヘビー級統一王者のモハメド・アリ (Muhammad Ali, 1942~2016)、短距離陸上選手のトミー・スミス (Tommie Smith, 1944~) や、1968年メキシコシティオリンピックで男子200メートル競走の同メダリストとなったジョン・カーロス (John Wesley Carlos, 1945~) などである。中でも、モハメド・アリは、ボクシングのライトヘビー級王者に輝いてもなお、自分が黒人として差別を受ける現実に怒り、白人社会を見限って黒人だけのイスラム教団 (Nation of Islam) に入信し、本名のカシアス・クレイから改名した。後には、ベトナム戦争への徴兵を拒否したことから有罪判決を受け、タイトルもライセンスも剥奪された人物である。このように、イスラム教に改宗し、徴兵も拒否したアリは、反キリスト教的で反愛国的な黒人として敵視されていた。もちろん、今ではアリは差別と闘い、良心に従って戦争を拒絶した人物、国家や国民を敵に回しても自分の信念を貫き、不屈の精神をリングの内外で発揮した人物という評価に変わってきている。³⁰

これらの男性選手とは違いギブソンはリスペクタビリティ・ポリティックスを拒否することはできなかった。彼女は自伝 *I Always Wanted to Be Somebody* の中で、ティーンエイジャーの頃、礼儀作法とゲームのバランスをとることを学んだと書いている。「しばらくして、淑女のように、真っ白なドレスに身を包み、誰に対しても礼儀正しく、それでい

²⁹ Smith, Mitzi J. "Paul, Timothy, and the Respectability Politics of Race: A Qomanist Inter(con)textual Reading of Acts 16:1-5." *Religions*, vol 10, no. 3, 2019. P.1.

³⁰ 鈴木・前掲注3) p.94-95.

て虎のようにプレーし、ボールの肝と光を打ち抜くことができるのだと理解した」と彼女は書いているが彼女はまさにリスpekタビリティの権化だった。³¹しかし、品行方正で人種的偏見を声高に主張しなかったにもかかわらず、ギブソンの成功は彼女を差別や偏見から遠ざけることはなかった。彼女はロッカールームに行けず、キッチンで着替えなければならず、クラブハウスにも入れなかった。11 のメジャータイトルを獲得したにもかかわらず、白人女性選手と同じような特権やサポートは与えられなかった。そして、結局「アメリカ最高の女子選手」と言われたギブソンですら、日々の差別と戦うテニス生活に疲弊し、ツアーを辞めざるを得なかった。³²彼女は自活するために他の方法を試みたが、1990年代には健康問題に苦しみ、引きこもるようになった。³³女性であり黒人であるという交差する差別や偏見、そしてそれらのマイノリティ属性をマジョリティの規範に従いながら代表せねばならぬ重圧は彼女のテニス選手としてのキャリアのみならず、人生をも押しつぶしたのだ。

第7節 結語

ギブソンは、黒人コミュニティや黒人エリートからの支援を受け、社会に向けて、人種的問題について発言するには十分すぎる功績を残すに至り、それを活用することへの期待も受けた。しかし、「黒人」であり「女性」という二つの属性を有する彼女が受けた差別は、彼女の功績に関わらず残酷で、彼女は人種的状况に対して、言葉を駆使して社会に訴えることはできなかった。それを誰が責めることができよう。実力で勝ち取ったタイトルや社会的地位をも無視する当時の人種差別が、彼女のテニス選手あるいは人間としての尊厳を回復不能なほど傷つけたのである。

このように、ギブソンは伝統的な意味での活動家ではなく、権利の平等について発言することはほとんどなかったが、彼女の運動能力による圧倒的な実績と敵対的な環境に身を投じる意欲は、その後のアフリカ系アメリカ人アスリートのために機会を創出した。ギブソンはテニスが白人男性のスポーツとみなされていた時代に、黒人選手にとっては成長環境に乏しい中、プロ選手として戦える実力を付け、黒人選手として白人の大会に出場する権限を獲得するなど、人種の壁、性別の壁と闘いながら、全4大会で優勝し、有色人種

³¹ Stanmyre. P.13-14.

³² Yven Sestin, Ervin Dyer "The Legacies of Tennis Champions Althea Gibson, Arthur Ashe, and the Williams Sisters Show the Persistence of America's Race Obstacles"(May 2021) p.198.

³³ Rex, Miller. *American Masters: Althea. Season 29, Episode 6.* B.J. King. NY: PBS. org, 1992, https://www.imdb.com/title/tt4964334/?ref_=ext_shr_lnk.

のスポーツ界における未来に光を与えた。その扉を開いた1人に、アーサー・アッシュ (Arthur Ashe, 1943-93) がいる。ギブソンとは異なり、アッシュは人種差別、偏見、不公正との経験について、驚くほど声を張り上げ、洞察力に富んでいた。彼はコートの内外で戦いを繰り広げ、自らの権利とアフリカ系全体の権利のために立ち上がった。彼は、人種差別の問題に加え、HIV や AIDS の啓発も行うなど、テニスコートを重大な問題に光を当てるためのプラットフォームとしても利用したのだ。³⁴ そのように勇敢に振る舞えたのはアッシュ自身の個性もあるが、やはり彼がアリやロビンソンのように男性であったということも否定できないだろう。黒人で女性でもあるアスリートが人種やジェンダーに端を発する差別や格差と正面から向かい合えるようになるためには第4章で取り上げるウィリアムズ姉妹の登場を待たねばならない。

³⁴ Stanmyre. P. 6-7.

第3章 ビリー・ジーン・キング (Billie Jean King)

男性中心主義に「実力」で勝利した同性愛者のテニスプレイヤー

第1節 はじめに：もう一人の「キング」

Billie Jean King は2時間5分で鎖に繋がれた全ての女性を解放した。(“The Open's Breakthrough of 1973,” *The New York Times*, 1973年9月21日.)

1973年、米国のプロテニス選手のビリー・ジーン・キング (Billie Jean King, 1943～) は「女子は競技水準が低いから賞金額も低くて当然だ」と主張し彼女を挑発した当時55歳の男性選手ボビー・リッグス (1918～1995) との「男女決戦 (Battle of the sexes)」に勝利し、ジェンダー格差撤廃への道を大きく切り拓いた。当時、テニスは女性スポーツの花形で、国際大会も多く、世間の注目度も高かったが、賞金額にはまだ10倍近い男女格差があった³⁵。女性選手がプロになれた数少ない競技の一つだったテニスでさえ、男女の懸賞金の格差は歴然としていたのである。

第1章で前述したように、「男女決戦」の前年である1972年に米国で施行された改正教育法第9条、通称「タイトル・ナイン」には、連邦政府の援助を受けている教育機関での性差別の禁止が盛り込まれていた。それ以降、男子が入れる運動部と同数の選択肢が女子にも与えられる必要があるという認識が全米に広まっていった。これに対し、財源の削減を恐れた既存の男子競技から反対の声も上がったが、男女の機会均等を唱える女性解放運動からの積極的なロビー工作もあり、1970年代には大学の女性スポーツをめぐる環境は大きく様変わりした。³⁶大学における女子の競技環境に改善が見られたことは、スポーツの民主化と競技水準の向上にとって喜ばしいことであったが、依然として世間には女子の競技を見下す態度がはびこっていた。

本章では、タイトル・ナインが女子テニスに与えた影響について、特に「男女決戦」に勝利した女子プロテニス選手であるキングに焦点を当てて検討する。プロテニス界における女性の地位向上と権利の獲得を進めた人物は多数存在するが、1970年代のタイトル・ナインの施行と同時期に、男性中心主義を体現するリッグスに文字通り「実力」で勝利した点で、キングの果たした役割は計り知れないほど大きい。公民権運動のキング牧師はすでに有名だが、「もう一人のキング」、つまり女性権利獲得運動のリーダーとしてのビリー

³⁵ 鈴木・前掲注6) p.113-114.

³⁶ 鈴木・前掲注6) p.113.

一・ジーンの功績が改めて広く認知される必要があるというのが本章の議論の中心にある。



Photo: Hulton Archive/Getty Images

第2節 時代背景

キングがテニス選手として活躍した時代、アメリカでは第二波フェミニズムと呼ばれる運動が展開していた。1960年代から1970年代にかけてアメリカで起こったこの運動は、大きく分けるとリベラル・フェミニズムと呼ばれる運動とラディカル・フェミニズムと呼ばれる運動からなっている。リベラル・フェミニズムの運動は、「女性の権利」を求める運動で、男性との平等を主張し、男女が対等な政治的・経済的な場の拡大を目指す運動であった。そして、公的な場における男女の平等に主眼を置き、「アメリカ社会の主流に女性を参画させる」ことを目指したのである。一方、ラディカル・フェミニズムの運動は、女性の解放を求める運動で、私生活とセクシュアリティにおける女性の抑圧に注目し、「個人的なことは政治である」とのスローガンを掲げ、結婚制度、家父長制度こそが女性を抑圧する元凶であるとし、「不払い労働者としての家事労働」・「母性神話」・「家父長制の告発」・「政治的レズビアンズム」など男性中心主義の社会や経済を根本から問い直す理論構築に貢献した。³⁷

この第二波フェミニズムの運動は、1960年代の政治社会の変化を受けて生まれた。政治的には、1963年のジョン・F・ケネディ（John F. Kennedy）大統領による「女性の地位に関する大統領諮問委員会」の設立と同年の平等賃金法成立、1964年の公民権法成立がリベラル・フェミニズムの運動成立に寄与した。また、アメリカに特有の公民権運動、ニューレフトの運動、ベトナム反戦運動などの社会運動はラディカル・フェミニズムの運動発

³⁷ 栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史』彩流社、2018、p. 167-168.

生の直接的な契機となった。

1963年に出版されたベティ・フリーダン (Betty Friedan) の『新しい女性の創造』は、「女性にとってアメリカンドリームは悪夢だ」³⁸と訴え、センセーションを巻き起こした。1949年にシモーヌ・ド・ボーボワール (Simone de Beauvoir) が著した『第二の性』からの影響も受けたフリーダンは、1950年代の郊外に住む中産階級白人の女性たちが、自己を犠牲にし、家庭という「快適な強制収容所」の中で、「名前のない問題」を抱えていると指摘した。³⁹この本は、アメリカにおけるリベラル・フェミニズムを中心とした第二波フェミニズムの運動をスタートさせる一つのきっかけになり、その原点とされる。⁴⁰このような流れを受けて、1972年にタイトル・ナインが施行された。キング自身もこの法律が自分の「ヒーロー」であり、これが20世紀の最も重要な法律のひとつであると信じていると述べている。⁴¹

第3節 テニスとフェミニズム

テニス界における白人女子選手への偏見は、ギブソンなど、非白人が経験したような「排他的」なものではなかったものの、「あるべき女性像」から乖離するものとして彼女たちに付き纏った。当時、テニスは、主婦や母親としての本当の人生を始める前の序章として、娯楽として楽しむためのものであり、競技や職業として本気で取り組むことは想定されていなかった。⁴²

1960年代に活躍し、ブラジル人のテニス選手として初めて世界の頂点に立ったマリア・ブエノ (1939～2018) は、コート上での優雅で素速い動きから「サンパウロのつばめ」と呼ばれ、よく女らしいミニスカートを着用していたが、彼女は、1960年代初頭から半ばまでの時代精神そのものに見えた。どんどんと短くなるスカートの裾が、解放された新しい精神のシンボルとなった時代である。露出の多い服を着て、女性の肉体をさらけ出すことが、社会の進歩と女性解放を促す推進力になると考える人もいたが、これは権利の獲得ではなく、むしろ搾取ではないかとの声も上がった。1960年代後半になると、ベティ・フリーダンの『新しい女性の創造』出版もあり、女性解放運動が一層激しくなったが、そこに

³⁸ ベティ・フリーダン、三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房、2004、12

³⁹ フリーダン・前掲注 38) p. 22

⁴⁰ 栗原・前掲注 37) p.169-170.

⁴¹ Greg Garber, *Billie Jean King: Title IX was a landmark moment, but more must be done*, 50 Hologic WTA TOUR, Published: June 23, 2022.

<https://www.wtatennis.com/news/2653801/billie-jean-king-title-ix-was-a-landmark-moment-but-more-must-be-done>

⁴² ウィルソン・前掲注 19) p.223.

においてテニスコートを舞台に改革を試みたのがキングだったのである。⁴³

第4節 生き立ち

1943年、カリフォルニア州で生まれたキングは、伝統的な家父長制を持つ両親の元で育った。キングの父親は海軍におり、非常に保守的で、愛国的で、反共産主義者であったと言われている。キングは、両親から誰にでも平等に接するように言われていたと回想するが、同性愛のようないくつかの問題に関しては、彼女の父親は「規範」から外れることに強く反対したようだった。

キングは11歳の時にテニスのキャリアを開始したが、習得が早かったという。大きなエゴと野心が、彼女をチャンピオンにしたという。大学時代には、自身がテニスの奨学金を受けていないのに対し、実力の劣る男性には奨学金が与えられていたことを指摘し、フェミニズム的な思想を持つようになっていった。その後も、男女のテニス選手に与えられる奨学金が不平等であることに次第に憤りを感じるようになったのである。⁴⁴

キングは、既存の社会の中で男女平等と機会均等を求める立場であるリベラル・フェミニストであり、「スポーツはお金が全て」と述べるなど、男女平等を実現するには同一賃金であるとも主張していた。自分自身の収入がなければ、女性は自立できない。結婚は身の安全を確保する格好のチャンスであり、物質面での安定を保証してくれた。だが、夫の好意だけが頼りの結婚は常に不安定なものである。不平等な結婚生活では金が権力となり、その権力を握るのは男だった。そのため、キングにとって、男女同額のツアー賞金を求める闘いはまさに、フェミニズムの目指すところと完全に一致していたのである。⁴⁵

第5節 キングの対男性軸における功績：「男女の戦い」

タイトル・ナイン施行以前のアメリカにおいて、テニスは女性選手がプロになれる数少ない競技のひとつであったが、賞金額や給料には男女間で大きな格差が存在した。1968年、キングがオープン化後最初のウィンブルドン・シングルスで優勝した時、男子の優勝者の賞金4800ドルに対し、彼女は1800ドルしか受け取れなかった。また、女子テニス選手は出場するトーナメントを見つけるのにも苦労し、給料も男子選手と同じではなかつ

⁴³ ウィルソン・前掲注19) p. 224.

⁴⁴ Paule-Koba, Amanda L. "PRESSURE IS A PRIVILEGE: BILLIE JEAN KING, TITLE IX, AND GENDER EQUITY." *Reviews in American History*, vol. 40, no. 4, 2012. P.712.

⁴⁵ ウィルソン・前掲注19) p. 223-36.

た。⁴⁶大学レベルでも、男子選手は奨学金をもらってテニスをする一方、キングは2つの仕事をしながら、カリフォルニア州立大学に通っていた。⁴⁷

このような状況において、1970年にキングを含む女子選手9名が、全米テニス協会に男女間の賞金格差を是正するよう求めたが、協会は応じず、キングらは女性だけのトーナメント「1970 Houston Women's Invitational/Virginia Slim Invitational」を開催するに至った。その後、1973年6月にトーナメント開催に関わった9名によって、女子テニス協会(WTA)が設立され、キングが初代会長に就任するなど、女子選手の待遇改善が図られ始めた。しかし、大会主催者側やリッグスを始めとする男子選手の間からは、女子の競技水準の低さを理由として賞金額は低くて当然だという声が上がった。現役を引退した55歳のリッグスは、現役の女子のトップ選手であったマーガレット・コートを打ち負かしたうえで、「女子の競技水準など所詮この程度だ」と、もう1人のトップ選手であったキングを性差別的な発言で挑発したのである。

だからこそ、1973年に行われた「男女の決戦」は、女性スポーツと女性解放運動の命運をかけたようなもので、その注目度は非常に高かった。1973年9月20日、3万472人の観客が女と男の一騎打ちを見ようとテキサス州ヒューストンのアストロドームに押し寄せ、さらに5000万人以上がテレビで観戦した。キングは古代の奴隷に扮した男たちが運ぶ金のゴンドラに乗ってクレオパトラ風に登場し、リッグスは女性モデルが引く人力車に乗って登場した。またアメリカ国外の15カ国にも中継されたが、この試合がアメリカに与えた衝撃は計り知れない。また、キング自身も、単にテニスの試合をしているのではなく、女性運動と全ての女性の希望を背負っているのだということを強く認識していた。

この試合において、キングは、男性優位主義者のリッグスに6-4、6-3、6-3のスコアで、ストレート勝利した。これは、あらゆる女性にとっての勝利だった。当時の新聞は、「キングは2時間5分で、鎖に繋がれた全ての女性を解放し、世界一のやり手(the world's No.1 hustler)であるリッグスの評判を著しく傷つけた」⁴⁸と大体的に報じ、「テ

⁴⁶ Dakin And one, *Five times US women athletes advocated for equality in sports*, CNN, Published: March 8, 2019. <https://edition.cnn.com/2019/03/08/sport/women-athletes-equality-discrimination/index.html>

⁴⁷ Jake Simpson, *Gus Told Me to Get Lost: Billie Jean King on Playing Tennis Before Title IX*, The Atlantic. <https://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2012/06/guys-told-me-to-get-lost-billie-jean-king-on-playing-tennis-before-title-ix/258684/>

⁴⁸ Billie Jean King wins in straight sets against Bobby Riggs in 1973's 'Battle of the Sexes', New York Daily News, Published Sep 19, 2015. <https://www.nydailynews.com/sports/billie-jean-wins-straight-sets-riggs-1973-article-1.2355262>

ニスも全女性が対等であると判定を下した！ ("Tennis Decides All Women Are Created Equal, Too.)」⁴⁹と高らかに宣言した。（以下の記事参照。）元女性スポーツ財団事務局長のドナ・ロピアアーノは、ニューヨーク・タイムズ紙の社説で、キングの勝利について、「たったテニス一試合で、ビリー・ジーン・キングは女性の大義のために、ほとんどのフェミニストが生涯で成し遂げられる以上のことをすることができた」と喝采を送った。⁵⁰このように、この試合は女性スポーツと女性解放運動の命運をかけたものであり、ここにおけるキングの勝利はスポーツにおける女性解放に大きな影響を与えた。結婚を機に仕事を辞めて専業主婦となることが主流であった当時、キングの生き方は、従来の女性とは一線を画すものであり、実力と知名度を兼ね備えた彼女は新しい力強く、自立した女性の象徴的存在になっていたのである。⁵¹



第6節 男女の二項対立を超えて：同性愛者としてのキング

1981年、元交際相手の女性、マリリン・バーネットが財産分与を求める訴訟を起こした時、キングが「同性愛者」であることが世間に広く知れ渡った。「男女の戦い」において男性中心主義に対して一定の勝利を獲得したキングであったが、性的指向のためにキングが直面した当時のアメリカ社会の現実は一層厳しく、彼女は表立って異性愛中心主義に対して挑むことはできなかった。この訴訟の結果、キングのCM契約は24時間の間に全て打ち切られた。⁵²当時の新聞記事は、「訴訟の是非に関係なく、プロテニス界の一部の関係者

⁴⁹ Naila-Jean Meyers, The Open's Breakthrough of 1973, *The New York Times*, Aug. 24, 2013.

<https://www.nytimes.com/2013/08/26/sports/tennis/the-opens-breakthrough-of-1973.html>

⁵⁰ Paule-Koba p. 712.

⁵¹ 鈴木・前掲注6) p.114.

⁵² Griffin, Pat. "Overcoming Sexism and Homophobia in Women's Sports." *Routledge*

は本日、この疑惑は過去 10 年間で莫大な成績を収めた女子選手（キング）にとって後退（setback）と見られる可能性が高いと述べた」と伝えた。また、「スポーツの成功には、イメージが非常に重要であるため、一般の人々の受け入れが不当に遅れるのではないかと懸念していると述べた人もいる（Some people close to the sport said today that they were concerned that because its image has been so important to its success that public acceptance might be slowed unfairly.）」とも報じた。⁵³

当時のアメリカ社会において、同性愛者であることは長らくタブー視されており、差別や偏見にあってきたが、スポーツ界では同性愛嫌悪が特に顕著だった。当時の新聞がキングの一連の事件を受けて、「同性愛はスポーツ市場において最もデリケートな問題であり、麻薬よりもデリケートで、暴力よりも物議を醸す問題だ（Homosexuality is the most sensitive issue in the sports marketplace, more delicate than drugs, more controversial than violence.）」⁵⁴と報じたように、テニス界においても絶対的なタブーであった。その背景には、第一に、これまでの議論にもあるように、スポーツ文化には伝統的な性別役割や男らしさのステレオタイプが大きく影響していることがある。特に、男子のスポーツでは、強さや競争心、精神的な強さが重要視されるため、選手が同性愛者とされると社会の期待に反すると感じられることがある。また、スポーツにおいて求められる選手同士のコミュニケーションが阻害されるということもある。男女に関わらず、信頼関係やチームの一体感を醸成するためには、ハイタッチやハグなど、身体的なコミュニケーションも必要であるが、同性愛者であるということで、観客が戸惑ってしまうということがあるという。実際に、キングも自身の自伝において、「ダブルスを組んで優勝したもの同士が抱き合って喜ぶ自然なしぐさにしても、男同士ならいいが、女同士がそれをしようものなら、どんな噂を立てられるか分からない。女であるがゆえ不当な風当たりの強さ、窮屈などを皮肉たっぷりに採り上げてみせてくれる。」と残している。⁵⁵加えて、スポーツは一般に大衆の注目を集め、多くのスポーツイベントはスポンサーシップに依存しているという経済的な枠組みもある。当時、女子プロバスケットボールのトップ選手は、「同性愛の問

Handbook of Sport, Gender and Sexuality, 2016, p. 265–274,
doi:10.4324/9780203121375.ch28.

⁵³ Lindsey, Robert. “Billie Jean King Is Sued for Assets over Alleged Lesbian Relationship.” *The New York Times*, 30 Apr. 1981,
www.nytimes.com/1981/04/30/us/billie-jean-king-is-sued-for-assets-over-alleged-lesbian-relationship.html.

⁵⁴ Amdur, Neil. “Homosexuality Sets off Tremors.” *The New York Times*, 12 May 1981,
www.nytimes.com/1981/05/12/sports/homosexuality-sets-off-tremors.html.

⁵⁵ ビリー・ジーン・キング、『テニスコートの女王』p.351.

題はそれほどデリケートであるべきではないが、社会がこの問題に対処する準備ができていないからだ。誰もがアスリートに注目する。弁護士、医者、実業家も同性愛者ですが、彼らは注目されていない。」⁵⁶と述べたが、これはまさしく、キングが直面した現実であった。一般論として、スポーツ選手は、公人として商業的な支持を求められ、若者の英雄的な模範とされる。そのため、同性愛者の選手がカムアウトすることで、一部のファンやスポンサーが差別的な反応を示す可能性があり、これはスポーツ選手のキャリアに悪影響を与えてきた。

キングのフェミニズムへの真摯な想いと行動は、彼女を内側からも外側からも、苦しめた。男性中心主義に挑戦するために積極的に活動し、圧倒的な実績を誇る女子テニス選手であったからこそ、社会がキングに対して向ける視線は厳しかった。賞金の男女格差をなくすためのテニス・フェミニズム運動が彼女にとってこの上なく重要だったからこそ、キングは同性愛者であることを公に認めたくなかったのだ。彼女の愛するテニスというスポーツを、当時の性規範からの「逸脱」という汚名から守ろうとしたのだろう。自分の身だけでなく、テニスの人気を損なわずにおくために。⁵⁷だからこそ、プライベート（コート外）では異性愛主義に挑戦したものの、公には同性愛者の権利獲得運動に参加することはなかったし、できなかったのだろう。そこからは、彼女の葛藤が垣間見える。

ジェンダーに話を戻すと、「男女の戦い」において、キングが男性中心主義に対して一定の勝利を獲得したとはいえ、女性テニス選手が直面した問題が本当にすべて一瞬で解決したわけではなかった。この時代の女子テニス選手にとって考えられる生き方には、グッシー・モランのように、華やかなスターとして男性から持て囃されるか、或いは結婚して引退し、良妻賢母になるなどの道があったが、いずれにおいても、「女らしさ」が求められており、これは現代にも共通しているかもしれない。そして、キングの場合は、そこに同性愛者であるという属性が交差する形で加わっていたのだ。男性中心主義に女性代表として挑んだ当時のキングにとって、同性愛者であるということは、自分の中でも、社会からもタブーとして捉えられていたが、彼女の葛藤は同性愛主義に不寛容な当時のアメリカ社会を映し出す出来事であったとも言える。

第7節 結語

タイトル・ナインの施行など、第二波フェミニズムが活発化する1970年代のアメリカスポーツ界において、男性中心主義に実力で勝利したキングは、スポーツとフェミニズム

⁵⁶ Ibid.

⁵⁷ ウィルソン・前掲注 1945) p. 371-375.

を結びつけることで、一般のフェミニズム活動家では与え得ることのない影響を社会に与えた。キングは、タイトル・ナインにより教育機関における男女差別の改善が試みられる時代に、プロスポーツの世界での差別にも光を当て、スポーツ界全体における男女差別の是正に真っ向から対峙した。キングは第二波フェミニズムとの関係から、人気ヒロインとしての役割の中で、現代の女性運動の願望と夢を体現するようになったのであり、キングはただのアスリート以上の存在となった。⁵⁸試合から 50 年が経過した現在、グランドスラムトーナメントの賞金は男女で同一になり、彼女の功績は語り継がれている。男女の決戦から 50 年後の現在、4 つのグランドスラムトーナメント全てにおいて、男女の優勝者には同一賞金が導入されている。この男女間の格差是正には、ウィンブルドン優勝者のヴィーナ・ウィリアムズなど貢献したが⁵⁹、キングの男女決戦における勝利がそもそもの賞金平等を推進するキャンペーンの引き金であったと言えるだろう。⁶⁰

一方で、テニスコートでは、スポーツをする女性という意味で、慣例的な女性像に挑戦していたキングは、テニスコート外では、女性は異性愛者でなければならないという規範にも挑戦していた。異性愛者の白人女性の象徴であるキング自身がセクシュアルマイノリティだったことは、「男女の戦い」であると同時に、女性像が一枚岩であるということに対して再考を求めている。つまり、彼女は、歴史よりも先行する形で、家父長制への挑戦に加えて、異性愛者であるという規範に対しても挑戦していた。さらに、現在の彼女は男性中心主義のみならず異性愛主義の両方に異議を申し立てる活動をしていることはもっと評価されるべきであろう。

ただし、キングはスポーツ界における白人女性の解放は進めたかもしれないが、ギブソンのような黒人女性選手が人種とジェンダーの二重差別を乗り越える手助けをすることはできなかった。これについては、次章で扱うウィリアムズ姉妹の登場を待たねばならない。

⁵⁸ Ware, Susan. "Game, Set, Match: Billie Jean King and the Revolution in Women's Sports." Chapel Hill, North Carolina Scholarship Online, 2014. P.10.

⁵⁹ *Serena Williams slams inequality and discrimination in open letter*, CNN, Published: November 30, 2016. <https://edition.cnn.com/2016/11/30/tennis/serena-williams-tennis-letter-equal-pay-discrimination/index.html>

⁶⁰ Christiane Amanpour and James Masters, *Billie Jean King: 'Women have to stick up for themselves and fight'*, CNN, April 1, 2016. <https://edition.cnn.com/2016/04/01/sport/womens-equal-pay-soccer-billie-jean-king/index.html>

第4章 ウィリアムズ姉妹 (Williams Sisters)

ポスト公民権運動時代における黒人女性のセレブアスリート

第1節 はじめに：

人々は肌の色で判断することができなかったから、大変だったでしょうね。今日になっても、違いはほとんどありません、40年しか経っていないのだから。何世紀にも渡る差別が40年で変わるはずがないのです。 ヴィーナス・ウィリアムズ⁶¹

2000年、ヴィーナス・ウィリアムズ(Venus Williams, 1980~)が1958年のアリシア・ギブソン以来、ウィンブルドンのアフリカ系アメリカ人女性優勝者となった。だが、彼女は、ギブソンと自身によるこの偉業を振り返り、上記のような悲観的なコメントを残した。ヴィーナスとセリーナ・ウィリアムズ (Serena Williams, 1981~) 姉妹は、その称賛と成功、そして公民権運動以来のいわゆる人種的進歩にもかかわらず、スポーツ界とより広い米国社会に存在し続ける黒人蔑視と女性軽視の影を常に感じている。そして、成功を収めた後でも、「ゴリラのよう」⁶²や「思考力のない黒人の体」⁶³などと揶揄され、侮辱を浴びせられてきた。

本章では、2000年代を生きる、ウィリアムズ姉妹が経験する社会からの賞賛と差別を分析し、現代の黒人女性アスリートをめぐる状況を考察する。また、カリフォルニア州のコンプトンという貧しい地域から育った2人の生い立ちの検討を通じて、人種、ジェンダーに加えて階級という視点からの分析も試みる。それらを踏まえて、今後のアメリカ社会におけるスポーツをめぐる、さまざまな社会的属性の「交差性」について検討する。

⁶¹ Qtd. In Navratil, Wendy, and Cassandra Cassandra. "It's like a Menu. They Can Look,..." *Chicago Tribune*, 19 July 1976, <https://www.chicagotribune.com/news/ct-xpm-2000-07-19-0007190124-story.html>.

⁶² Desmond-Harris, Jenee. *Despite Decades of Racist and Sexist Attacks, Serena Williams Keeps Winning*. Vox.com, 28 Jan. 2017, <https://www.vox.com/2017/1/28/14424624/serena-williams-wins-australian-open-venus-record-racist-sexist-attacks>.

⁶³ Carrington, Ben. "Fear of a Black Athlete: Masculinity, Politics and the Body." *Politics and the Body*, vol. 2001, 45, 2002, p. 91-110.



Photo: Hulton Archive/Getty Images

第2節 時代背景

ジャッキー・ロビンソンも活躍した二十世紀半ば以降の時代に、新興黒人中産階級のエリート（ブラック・ブルジョワジー）の支援もあり一躍有名になったギブソンとは異なり、ヴィーナスとセリーナ・ウィリアムズは、黒人がスポーツをすることがより一般化し、マイケル・ジョーダンが NBA のスーパースターとして活躍した時代から恩恵を受けた。黒人エリートがギブソンを次の「女性版ジャッキー・ロビンソン」になる可能性があると思っていたのに対し、リック・マッチのような白人のリクルーターはヴィーナス・ウィリアムズを「女性版マイケル・ジョーダン」になる可能性があると思っていた。⁶⁴

1950年代から60年代にかけて活発に起こった公民権運動から20年経った、いわゆる「ポスト公民権運動」の時代、黒人は社会の様々な場面で活躍するようになっていた。特に、2009年のオバマ政権誕生は象徴的である。ジョージタウン大学の社会学者ダイソンは、オバマ勝利演説の翌日に、黒い肌のオバマが大統領に選ばれたことはアメリカ社会の「希望の再生を象徴する」出来事であり、「社会的な無視や文化的な孤立に甘んじてきたあまたの黒人にとって、オバマの言葉とヴィジョンはアメリカをひとつの家族に戻すような橋をかけたのである」と絶賛した。⁶⁵

同様の動きは、スポーツの分野でも起こった。1970年代以降、公民権運動やブラック・パワー運動における黒人アスリートの活動もあり、黒人アスリートは一般的によく認

⁶⁴ Yven, Ervin p.201.

⁶⁵ Dyson, Michael Eric. "Race, Post Race." *Los Angeles Times*, 5 Nov. 2008, www.latimes.com/opinion/la-oe-dyson5-2008nov05-story.html.

められ、報われるようになった。テレビ放映されるスポーツと、次第にスポーツ界の新しい顔となった黒人アスリートの活躍が融合し、市場価値の高い黒人スーパースターが誕生したのである。アメリカ企業の財政的支援も加わり、O.J.シンプソンのような人気アスリートを起用したブランド商品は、エンドースメントを多用するスポーツ文化を生み出し、1990年代にはバスケットボールのジョーダンがスーパースターといえる地位を獲得した。このように、彼女たちの時代は、ギブソンの時代からは隔世の感がある。黒人女性選手を取り巻く状況の違いは、彼女たちがメディアにおいてギブソンとではなく、主に男性のスーパースターであるジョーダンと比較されることから確認できる。ただし、ギブソンの黒人女性としての歴史的な功績が風化してしまったわけではない。その証拠に、セリーナは1999年にアフリカ系アメリカ人女性としてギブソン以来の優勝全米オープン優勝を果たした際に、「アルシア・ギブソンが私たちのために道を開いてくれた（“Althea Gibson paved the way for us.”）」と語っている。⁶⁶ウィリアムズ姉妹にとって、ギブソンが人種差別の文脈において、偉大な先駆者であることには間違いのないのである。

第3節 ブラックフェミニズムのシンボリック的存在

ウィリアムズ姉妹の「人種」と「ジェンダー」への戦いについて検討する上で、ブラックフェミニズム、ひいてはインターセクショナリティという概念の歴史は確認に値する。

インターセクショナリティという言葉には、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国家等が交差する場に身を置き、そこから社会の不平等と不正を問うてきた活動家、思想家、知識人が歩んだ奇跡が埋め込まれている。インターセクショナリティは、黒人女性の経験に根差しつつも、黒人女性のためだけのものではない。そこには、黒人解放、警察暴力との対峙、移民の権利獲得、女性解放、多様な性のあり方の追求、貧困と格差を問いただす視点、国境を越えて不平等、不正と闘う人々との連帯が刻まれている。それは差異を隠蔽するためのものではなく、社会に遍在する様々な権力構造に光を当て、その入り組んだ構造の解明と改革を目指す思想なのである。⁶⁷

これまでの議論を踏まえるならば、ウィリアムズ姉妹のテニスのキャリアにおいて、社会からあくまでも一個人と見て欲しいのに、「黒人女性」のステレオタイプが強く付き纏ったことは驚くに値しない。彼女たちの容姿、発言、行動の随所に関して、「黒人女性」

⁶⁶ Barber, Terry. *Althea Gibson*. Grass Roots Press, 2007. p.44.

⁶⁷ 藤永康政、松原宏之『「いま」を考えるアメリカ史』ミネルヴァ書房、2022、p. 249.

としてのステレオタイプに則った評価がされた。このような状況に対し、テニス界を変えられるだけの影響力を持って挑戦するウィリアムズ姉妹は、ブラックフェミニズムのシンボリックな存在と言えるだろう。

第4節 生き立ち

1990年代、ウィリアムズ姉妹は悪名高いカリフォルニア州コンプトンで、父親のリチャードが苦勞して安全に利用できるようにしたボロボロのコートでテニスを学び始めた。それは、ヒップホップが流行し、コカインが蔓延し、ストリート・ギャングが猛威を振っていた時代である。コンプトンのような人種隔離された都市部の黒人たちの地域社会は、就職難、貧困、生活保護への依存、機能不全に陥った学校などのせいで、荒廃していた。その地域の資源的な乏しさ、社会的孤立は、ウィリアムズ家が有益なネットワークを築くことを容易にする状況ではなかった。そのような状況においても、彼女たちの父には、娘たちをテニスチャンピオンに、ゲッター出身の「黒人のシンデレラ」⁶⁸にするという確固たるビジョンがあった。父親および本人たちの絶え間ない努力のおかげで、紆余曲折の後にフロリダのテニス・アカデミーを卒業したウィリアムズ姉妹であるが、プロ選手としての初期キャリアの大半を、素人の両親から指導を受けるという、常識では考えられない方法をとったのはこのような生き立ちが原因だったのである。困難な状況にありながらも、状況を変えるための創意工夫を行ったウィリアムズの両親は、ヴィーナスとセリーナがテニスで大成功を収めるための基礎を築いたのである。⁶⁹

両親と本人たちの努力が実を結び、姉妹はそれぞれ偉業を成し遂げた。1999年以來、セリーナは34のグランドスラム・タイトル、4つのオリンピック金メダルで女子プロテニス界を席卷し、2002年から2017年まで、7度世界ランキング1位に輝いている。⁷⁰ヴィーナスも、シングルスで7度のグランドスラムタイトルを獲得し、シドニーオリンピックの女子シングルスでは金メダルを獲得した。⁷¹それぞれの姉妹が世界ランキング1位を獲得したことは、テニス史上初の偉業である。

⁶⁸ Yven, Ervin p.201.

⁶⁹ Yven, Ervin p.200.

⁷⁰ Gitlin, Marty. *The 100 Greatest American Athletes*. Rowman & Littlefield, 2018. 147-148.

⁷¹ Carty p. 136.

第5節 人種・ジェンダー・ビジネスにおける功績

セリーナとヴィーナスの並外れた功績は、白人のスポーツだったテニスのイメージやルールを変え、女性アスリートの活躍を推進し、さらにはビジネスの世界に進出することで、黒人女性テニス選手として、アメリカ社会に大きな変革をもたらしている。

まず、ウィリアムズ姉妹は、歴史的に上流階級の白人が支配してきたこのスポーツにおいて、マイノリティの壁を打ち破ってきた。2001年以來、カリフォルニア州インディアンウェルズで開催されてきたトーナメントでは、彼女と彼女の家族を標的とした観客からの人種的な嘲笑のため、プレーを拒否してきた。自伝の中で、ウィリアムズは、トーナメントに出場しないことによる100万ドルの罰金は、人種差別に立ち向かうだけの価値があったと述べている。⁷²

彼女たちは、ビリー・ジーン・キングの意思を継ぎ、テニス選手の男女間の賃金格差の是正を強く主張してきた。また、2012年、ヴィーナスは妹のセリーナとともにナイジェリア、南アフリカ、その他のアフリカ諸国を訪問し、少女や若い女性にテニスをプレーするだけでなく、ジェンダーや人種に基づく障壁に挑戦することも奨励している。⁷³

さらに、世界トップアスリートとしての地位は、セレブとしての役割にも波及している。特にセリーナは、プーマ (PUMA) やナイキ (NIKE) などと契約を結ぶだけでなく、自身のブランド「Aneres」も立ち上げている。⁷⁴ また、2023年1月には、テニス界のレジェンドであるセリーナが、WTA テニスプレーヤーとして最も多くの賞金を稼いだ選手としてランキングのトップに立った。2022年9月に引退した彼女の輝かしいキャリアにおいて、セリーナは9,482万ドルの賞金を獲得した。姉のヴィーナスも、4,240万ドルで2位につけている。⁷⁵ このような彼女たちの経済的な影響力の大きさもあり、より多くの広告主が、女性のトップアスリートを起用したマーケティングを行うように変化してきている。

⁷² Wright, Joshua. “Be Like Mike?: The Black Athlete’s Dilemma.” *Spectrum: A Journal on Black Men*, vol. 4, no. 2, 2016, pp. 1–19. *JSTOR*, <https://doi.org/10.2979/spectrum.4.2.01>.

⁷³ Mark, Monica. “Venus and Serena Williams Champion Women’s Rights on Africa Tour.” *The Guardian*, Guardian News and Media, 31 Oct. 2012, www.theguardian.com/world/2012/oct/31/venus-serena-williams-africa-tour.

⁷⁴ Nast, Condé. “セリーナ・ウィリアムズ / Serena Williams.” *Vogue Japan*, www.vogue.co.jp/tag/serena-williams?page=4.

⁷⁵ “WTA - Global Tennis Players by Career Prize Money Earnings 2023.” *Statista*, 12 Dec. 2023, www.statista.com/statistics/807745/wta-tennis-players-by-prize-money-earnings/#:~:text=As%20of%20January%202023%2C%20tennis,U.S.%20dollars%20in%20prize%20money. Accessed 05 Feb. 2024.

この状況において、彼女たちが伝統的な男性の領域に踏み込むにつれ、消費者にアピールするためにジェンダーがどのように使われるかという問題は、たしかに複雑になっている。⁷⁶過去数十年の間に、フェミニズムと「女性らしさ」の描写の変化は、市場シェアを獲得するための様々な戦略を表すようになった。脆弱性、もろさ、依存性、従属性といった伝統的な描写からの脱却を試み、筋肉、強さ、フィットネス、競争心を含む女性らしさの新たな概念を受け入れるアスリートを打ち出している変化もある。⁷⁷メディアによる表象については諸々の問題もあるが、姉妹の活躍のお陰で、より多くの女性アスリートがビジネスの機会に起用されるようになったことは良いことだろう。

第6節 ウィリアムズ姉妹の直面した二重の差別

一方で、黒人女性テニス選手の2人は、人種とジェンダーという二重の差別の現実を常に突きつけられた。例えば、セリーナに対する頻繁すぎるステロイド薬物検査や、テニス界での彼女たちの活躍ぶりに対する人種差別的なメディア描写、セリーナが出産時に死にかけて人種差別的な経験を鑑みると、姉妹は数々の功績や財産にも関わらず、医療やそれ以外の分野の致命的な制度的人種主義の前では、黒人女性として相変わらず脆い存在なのだ。⁷⁸

人種差別

ウィリアムズ姉妹は、その活躍と成功、そして公民権運動以来の人種意識の変化にもかかわらず、スポーツ界とより広く社会に存在し続ける人種主義の影を思い知らされる。例えば、2001年、ヴィーナスがウィンブルドンで優勝した翌年、カリフォルニア州インディアンウェルズで開催された大会で、姉妹は人種差別に遭遇した。姉妹が対戦するはずだった準決勝で、ヴィーナスが試合開始4分前に腱鞘炎を理由に負傷退場したのだが、これに対して、2人の父親が、娘に身を引くように頼んで試合を仕組んだという噂が流れた。翌日、セリーナは決勝でキム・クライスターズと対戦し、勝利したが、その試合中、家族は人種差別主義者の群衆から、ブーイングや嘲笑を受けた。彼女の父親は、ある男が娘に対して「75年だったらよかったのに、生きたまま皮を剥いでやろう」と人種差別的な言葉を浴びせたと主張した。⁷⁹この事件について、セリーナは「黒人が奴隷制度から解放されて

⁷⁶ Carty p. 136.

⁷⁷ Carty p. 137.

⁷⁸ ダイナ・レイミー・ベリー、カリ・ニコール・グロス、兼子歩、坂下史子、土屋和代訳『アメリカ黒人女性史 再解釈のアメリカ史・1』勁草書房、2022、p.295.

⁷⁹ Mr. Williams Alleges Racism at Tennis Tourney.” *ABC News*, ABC News Network,

100年以上経ちますが、人々は今でも少し苦勞しています。そんなに長くは経っていない。人種がこの特定の状況と関係があるかどうかはわからない。でも一般的には、アメリカにはまだ人種差別に関する小さな問題が残っていると思う」と述べた。ウィリアムズ姉妹が2000年のシドニー・オリンピックでアメリカ代表として金メダルを獲得した翌年、コンプトンから南へ2時間のところにある地元カリフォルニア州でこの事件が起こったことは、差別が継続していることを如実に物語っている。⁸⁰

その後も、ウィリアムズ姉妹は、人種差別、性的差別、非人間的差別を受け続けた。2014年秋、ロシア・テニス連盟のシャミル・タルピスチェフ会長は、ロシアのテレビ番組でセリーナとヴィーナスの性別に疑問を呈したことで、女子テニス協会から2万5000ドルの罰金と1年間のツアー出場停止処分を受けた。彼はヴィーナスとセリーナを「ウィリアムズ兄弟」と表現していたが、これはギブソンへの揶揄に通じる嫌悪感を抱かせる発言だった。*Ms. Magazine* 誌のライターは、この発言を「女性嫌悪、人種差別、トランスフォビアという地獄の三重苦」に包まれた身体の恥辱だと非難した。⁸¹

特に輝かしいテニスカリヤを持つセリーナは、その体格や体型、パワーゲームの次元を狙った人種差別的偏見の標的とされた。黒人アスリートは、「思考力のない黒人の体」として表現されることがあまりにも多い。⁸²つまり、常に強く、パワフルで、素早いアスリートでありながら、肝心な場面での認知能力が欠けているとされるのである。このような人種差別的なイメージが、重要な場面で冷静さと天才的な能力を発揮するとされる白人選手と彼らを区別しているとされた。あるスポーツライターは、セリーナが「ナチュラル・アドバンテージ」を持っていると批判されるのはこのためであり、「まるで彼女の信じられないような能力が、彼女のすぐ後ろにいる東欧の磁器のようなブロンドの選手の邪魔をしているかのようだ」と述べた。⁸³ 2015年の全仏オープンでルーシー・シャファルジョバに勝利した後、あるソーシャルメディアのコメンテーターはセリーナを「ゴリラのように見え、ボールを打つときにうなり声を上げるとゴリラのように聞こえる、結論から言えば、彼女はゴリラだ」と書いた。⁸⁴

27 Mar. 2001, abcnews.go.com/Sports/story?id=99759&page=1.

⁸⁰ Yven, Ervin p.201.

⁸¹ Gaston, Corinne. "Serena and Venus Williams Battle More Body-Shaming." *Ms. Magazine*, 23 Oct. 2014, msmagazine.com/2014/10/23/serena-and-venus-williams-battle-more-body-shaming/.

⁸² Carrington, Ben. "Fear of a Black Athlete: Masculinity, Politics and the Body." *Politics and the Body*, vol. 2001, 45, 2002, p. 91–110.

⁸³ Whelan, David. "Does Tennis Have a Race Problem?" *VICE*, 18 June 2015, www.vice.com/en/article/pg5njm/does-tennis-have-a-race-problem.

⁸⁴ Desmond-Harris, Jenee. *Despite Decades of Racist and Sexist Attacks, Serena*

さらに、2008年、ジェームス・マッケイとヘレン・ジョンソンは *Social Identities* 誌に、「アフリカ系アメリカ人のスポーツウーマンの表現におけるポルノ的エロティシズムと性的グロテスク」について寄稿した。⁸⁵ 彼らの主張は、スポーツは白人が黒人をどのように構成し、見ているかを分析するためのレンズとして使われているというものだ。このレンズは、黒人は動物的で攻撃的であり、特に黒人女性は男性的で魅力がなく、同時に過度に性的であるというお馴染みのステレオタイプに基づいたセリーナに関するコメントを引用していた。加えて、2012年に *Ms. Magazine* 誌に寄稿したアニタ・リトルは、黒人女性の歴史的な人種化とセクシュアル化を強調した。彼女は、セリーナの体格が人種的にセクシュアル化されていることを、1800年代に見世物小屋のアトラクションとしてヨーロッパの観客の前に展示された「ホッテントット・ヴィーナス (Hottentot Venus)」(本名 サールジェ・パールトマンというアフリカ人女性)の遺産と結びつけている。⁸⁶ 「セリーナのような黒人女性がどんなに大成功を収めようとも、"ホッテントット・ヴィーナス"の遺産は、都合のいいときに醜い頭をもたげる用意ができています」と非常に差別的なコメントを残した。⁸⁷

また、人種差別は賞金にも影響している。2015年、セリーナの賞金は1300万ドルだった。マリア・シャラポワは彼女と2度対戦してセリーナに敗れているが、この白人選手の賞金は2300万ドルだったという。⁸⁸ ここで検討されるべきは、セリーナのようなスター選手を含むすべての女性選手に対する長年の偏見と、美のシンボルがこれらの差別問題の根底にあるという事実だ。シャラポワは痩せていて、ブロンドで、白人である一方、セリーナ・ウィリアムズは筋肉質で、太めで、黒人である。⁸⁹ 両者の違いには、人種とジェンダーが交差した偏見や差別が混在している。テニス界のみならず、広告業界も女性選手が

Williams Keeps Winning. Vox.com, 28 Jan. 2017, <https://www.vox.com/2017/1/28/14424624/serena-williams-wins-australian-open-venus-record-racist-sexist-attacks>.

⁸⁵ McKay, James, and Helen Johnson. "Pornographic Eroticism and Sexual Grotesquerie in Representations of African American Sportswomen." *Social Identities: Journal for the Study of Race, Nation and Culture*, vol. 14, no. 4, 2008, p. 491–504, <https://doi.org/10.1080/13504630802211985>.

⁸⁶ Little, Anita. "Serena Williams, the Hottentot Venus and Accidental Racism." *Ms. Magazine*, 15 Dec. 2012, msmagazine.com/2012/12/15/serena-williams-the-hottentot-venus-and-accidental-racism/.

⁸⁷ Ibid.

⁸⁸ Chase, Chris. "Why Does Maria Sharapova Earn \$10 Million More in Endorsements than Serena Williams?" *USA Today*, Gannett Satellite Information Network, 1 Sept. 2015, ftw.usatoday.com/2015/09/serena-williams-addresses-why-maria-sharapova-earns-10-million-more-in-endorsements.

⁸⁹ Yven, Ervin p.202.

体現する能力以上に、彼女たちの人種化された「美」に明らかにより大きな対価を払うのだ。

2015年、ニューヨーク・タイムズ誌の記事で、セリーナはこの問題に正面から挑むコメントを残した。「白人でブロンドの人を売り出したいのなら、それは彼らの自由だ。私には、私と仕事ができることをとても喜んでくれるパートナーがたくさんいる。私はここに座って、私の方がたくさん勝っているからもっと上位にいるべきだなどとは言えない。彼女（＝シャラポワ）も懸命に働いてくれたのだから。誰のテーブルにも十分な量がある。私たちは感謝しなければならないし、次の黒人がそのリストの1位になれるように、前向きに考えなければならない。」⁹⁰

女性差別

いまだに白人男性が牛耳るマスメディアの報道は、ビーナスとセリーナを理想の女性像の埒外に置いている。⁹¹ビーナスは「コンドルの翼を広げたような (possessing the wingspan of a condor)」などと、セリーナは「ヘビー級ファイター (heavyweight fighter)」、「巨体 (huge)」、「テニス界で最も肉体的に堂々とした選手 (the most physically imposing player in tennis)」などと表象されてきた。この姉妹はまた、「男性的 (masculine)」、「攻撃的 (aggressive)」、「ラグビー・ロック・フォワード (rugby lock forward)」、「叩きつける (pummeling)」、「圧倒的 (overwhelming)」、「威圧的 (overpowering)」、「捕食者 1 と捕食者 2 (predator one and predator two)」などとも表現されることすらあった。⁹²人種主義的で男性中心主義的なマスメディアは、ウィリアムズ姉妹を「女性らしさ」の規範とされる特徴を欠く存在として描き、白人を理想として人種化された「女性らしさ」、そして異性愛を特権化してきたと言える。⁹³これらの描写は、黒人アスリートが「女性的」であると同時に強いことを賞賛されることがほとんどないという事実を浮き彫りにしている。⁹⁴ テニスがほぼ白人だけのスポーツであり、伝統的な「女性らしさ」の概念が服装や外見の面で尊重さ

⁹⁰ Rankine, Claudia. "The Meaning of Serena Williams." *The New York Times*, 25 Aug. 2015, www.nytimes.com/2015/08/30/magazine/the-meaning-of-serena-williams.html.

⁹¹ Douglas, Delia. "To Be Young, Gifted, Black and Female: A meditation on the cultural politics at play in representations of Venus and Serena Williams." *Sociology of Sport Online* 5, 2002.

⁹² Ibid.

⁹³ Wamsley, Kevin, B. "The Public Importance of Men and the Importance of Public Men: Sport and Masculinities in 19th Century Canada." *Sport and Gender in Canada*, ed. Paul White and Kevin Young, Oxford University Press, 1999. P. 24-39.

⁹⁴ Carty, p.147.

れる競技分野のひとつであったという歴史も、このような差別的な描写を助長しているのかもしれない。

セリーナの素晴らしい才能は、彼女の身体に対する人種差別的で性差別的な白人テニス競技役員の監視統制によって、あまりにも頻繁に汚されている。こうした攻撃は、スポーツ規定や服装規定という口実で行われているのだ。例えば、2018年、全仏テニス協会会長は、選手たちが行き過ぎてしまったため、全仏オープンではドレスコードを実施すると発表した。セリーナが着ると力が湧くと感じた黒いキャットスーツを着こなし、それが試合中のコートで彼女の筋肉質の曲線美を包み込んだ後のことだった。彼は特にセリーナを標的にしながら、「人は試合と場所に敬意を払わなければなりません」⁹⁵と述べた。

選手としても自身の権利における自由の闘士としてもコートに行き訴えることに慣れているセリーナは、2019年の全仏オープンに、「母、チャンピオン、女王、女神」の言葉で飾られた、オーダーメイドのシマウマ柄のアンサンブルで出場した。聴衆が目の前にいる伝説的人物のことを確実に理解できるように、これらの言葉はフランスで書かれていた。あるリポーターがさらに、こうした言葉は背負うには大きすぎるものではないのかと聞いた時、セリーナは「背負うには大きいです、セリーナ・ウィリアムズであることもそうなのです」と雄弁に答えた。⁹⁶彼女はその日の試合にも勝利し、試合と同様に完璧な反論を述べたが、これは、彼女の偉大さを傷つけようとする誰かをすぐに黙らせなければならなかった数十年間の経験を示すような返答だった。⁹⁷

第7節 結語

ウィリアムズ姉妹は、その圧倒的な実績をもって、人種差別、ジェンダー問題の両方の文脈において、大きな影響を与えている。彼女たちが、社会の規範に対して異議を呈し続けられる背景には、野心家の父を持つ彼女たちの個性も大きいだろうが、現代がポスト公民権運動の時代であり、社会からの重圧がギブソンの時代からは比べ物にならないくらい変化していたという、アメリカ社会の変化も大きいだろう。

一方で、それでもなお彼女たちは人種、ジェンダーの両方の枠組みから差別を受け続けた。大衆によるメディアへのアクセスがより一般化する中、上記のような、記者やコメンテーターの表現方法は、人々の価値観形成に大きな影響を与える。スポーツ選手の表象

⁹⁵ Fleming, Joseph. “French Open Ban on Serena Williams’ Catsuit Show Tennis Just Can’t Get Out of Its Own Way.” USA Today, October 18, 2019.

⁹⁶ Gleeson, Scott. “Serena Williams Debuts Zebra-Striped Outfit in Bold Fashion Statement at French Open.” USA Today, May 27, 2019.

⁹⁷ ベリー・前掲注 78) p.296.

は、日本でも問題にあがる。⁹⁸

⁹⁸ 国立陽子は、マスメディアに登場する女性アスリートたちが、女らしさから逸脱した存在として描かれていることを指摘する。女性アスリートたちは、スポーツにおいてやることは男性並み、精神も男性並み、私生活においても女らしさのかけらもない、という内容で報じられることがあるという。特に、柔道やソフトボールなどの種目において一流の結果を残す選手は、女らしさとは程遠いということが新聞上で述べられている。これに対して、記事は、「女らしくない」スポーツをしている女性は女らしさを備えていないと暗示しているのではないかと指摘する。新聞記事は女性アスリートの男らしさに関するステレオタイプを強化し、同時にあるべき女性像、すなわち女らしさに関するステレオタイプも強化している可能性が高い、という。国広陽子『メディアとジェンダー』勁草書房, 2012, p.123.

おわりに

本稿では、アリシア・ギブソン、ビリー・ジーン・キング、及びウィリアムズ姉妹の人生とその周辺環境の分析を通じて、テニスにおいては、特権階級を歴史的に構成してきた「中産階級もしくは上層階級の白人男性」に当てはまらない女性や非白人が虐げられるという、アメリカ社会の格差と差別の現実を突きつけつつも、これらのマイノリティが躍進することで社会の多様性推進を牽引する役割を果たしてきたことを論じてきた。

第1章で検討したギブソンは、未だ人種差別が色濃く残る20世紀前半の時代に、テニスコートで実績を残した。その功績故に、「女子テニス界のジャッキー・ロビンソン」として、人種を代表するスポークパーソンになることを期待されたが、彼女を取り巻く当時のアメリカ社会は黒人女性に寛容でなく、その差別の現実には彼女に突き刺さった。このように、アメリカで黒人女性であるが故に、政治的、活動家的な役割こそ担えなかったものの、彼女が、実力で果たしたテニス版公民権運動の功績は、後世に道を開いた。第2章で検討したキングは、第二波フェミニズムや1972年のタイトル・ナインの施行も後押しし、男性中心主義に実力で挑み、勝利を収めた。彼女は、スポーツとフェミニズムを結びつけることで、普通のフェミニズム活動家ではあり得ないほどの影響を社会に与えた。その一方で、「同性愛者」であることは、彼女のフェミニズムへの想いが真摯なものであるが故に、彼女をコートの内外から苦しめることとなったが、男女の二項対立を超えて、男性中心主義、及び異性愛主義の両方に挑んだ勇敢な選手であった。そして、第3章で検討したウィリアムズ姉妹は、その圧倒的な実績をもって、人種、ジェンダーの両方の文脈において社会に影響を与えている。彼女たちが、社会から自分たちを「黒人女性」としてではなく「一個人」として認めさせようと、堂々と社会の規範に意を呈すことができる背景には、ギブソンを始めとする黒人アスリートや経済、政治の場面で活躍する黒人の存在があることは確かであり、彼女たちを取り巻く社会は、ギブソンのものとは全く異なる。一方で、彼女たちは世界チャンピオンとして熱いスポットライトを浴びているがゆえに、黒人女性が「異常に性的で (hypersexual) 」で「動物的 (beastly, bestial) 」であるという古くから続く人種差別的なイメージから逃れることができない現状があり、これには更なる挑戦が求められている。

このように、1900年代から現代にかけて生きた4人の女子テニス選手の歴史を辿ると、彼女たちの功績により、アメリカ社会の多様性が促進された側面がある一方で、彼女たちは、周囲で渦巻く歴史的出来事の展開から逃れることはできず、時には社会のジェンダー、人種、性的指向に対する厳しい差別や偏見の視線を突きつけられることになった。スポーツとは、道具であり、娯楽であり、本来、立場や価値観の異なる人同士の間でも、ルール

のもと、同じ土俵で公平に勝負を行い、勝ち負けを経験する点で、人と人との交流を促すものであるはずである。ここにおいて、テニスは、4人の女子選手たちの間で、政治的な運動とは異なる方法で、女性、黒人、そして両者の属性が交差する黒人女性の解放を一定程度果たすことに貢献した。しかしながら、平等なルールの下で平等に評価されるべきスポーツの功績をもっても、既存の社会的なレッテルや偏見により、彼女たちは、正当な評価を受けることに苦しんだ。そこには、アメリカ社会の矛盾があった。規範を壊したくないという保守的な側面と、人々は実力で評価されるべきであるという実力主義的な側面との葛藤である。この矛盾の狭間において、テニス選手として、社会的な圧力に屈さず、自分のために、社会のために戦った彼女たちの功績は、これからも評価され続ける必要があるのである。

参考文献

【主要一次資料】

- Marbel, Alice. "A Vital Issue." *American Lawn Tennis Magazine*. 1 July 1950.
<https://cdn0.scrvt.com/c2465e9022ba946df66d1244a69b1c75/a20d82cad29e73bb/c30905d4c41e/Alice-Marble---Althea-Gibson-Letters.pdf>
- Billie Jean King wins in straight sets against Bobby Riggs in 1973's 'Battle of the Sexes*, *New York Daily News*. 1973.
- Lindsey, Robert. "Billie Jean King Is Sued for Assets over Alleged Lesbian Relationship." *The New York Times*, 30 Apr. 1981,
www.nytimes.com/1981/04/30/us/billie-jean-king-is-sued-for-assets-over-alleged-lesbian-relationship.html.
- Amdur, Neil. "Homosexuality Sets off Tremors." *The New York Times*, 12 May 1981,
www.nytimes.com/1981/05/12/sports/homosexuality-sets-off-tremors.html.
- Wilson Sporting Goods Company and the Women's Sports Foundation, "The Willison Report: Men, Dads, Daughters and Sports." Women's Sports Foundation, 1988.
- "Serena Williams on Booing: 'I'm Just a Kid.'" *ESPN*, ESPN Internet Ventures, 18 Mar. 2001, www.espn.com/tennis/news/2001/0317/1157027.html.
- Mr. Williams Alleges Racism at Tennis Tourney." *ABC News*, ABC News Network, 27 Mar. 2001, abcnews.go.com/Sports/story?id=99759&page=1.
- Little, Anita. "Serena Williams, the Hottentot Venus and Accidental Racism." *Ms. Magazine*, 15 Dec. 2012, msmagazine.com/2012/12/15/serena-williams-the-hottentot-venus-and-accidental-racism/.
- Gaston, Corinne. "Serena and Venus Williams Battle More Body-Shaming." *Ms. Magazine*, 23 Oct. 2014, msmagazine.com/2014/10/23/serena-and-venus-williams-battle-more-body-shaming/.
- Griffin, Pat. "Overcoming Sexism and Homophobia in Women's Sports." *Routledge Handbook of Sport, Gender and Sexuality*, 2016, pp. 265–274,
doi:10.4324/9780203121375.ch28.
- Whelan, David. "Does Tennis Have a Race Problem?" *VICE*, 18 June 2015,
www.vice.com/en/article/pg5njm/does-tennis-have-a-race-problem.

- Rankine, Claudia. "The Meaning of Serena Williams." *The New York Times*, 25 Aug. 2015, www.nytimes.com/2015/08/30/magazine/the-meaning-of-serena-williams.html.
- Chase, Chris. "Why Does Maria Sharapova Earn \$10 Million More in Endorsements than Serena Williams?" *USA Today*, Gannett Satellite Information Network, 1 Sept. 2015, ftw.usatoday.com/2015/09/serena-williams-addresses-why-maria-sharapova-earns-10-million-more-in-endorsements.
- Fleming, Joseph. "French Open Ban on Serena Williams' Catsuit Show Tennis Just Can't Get Out of Its Own Way." *USA Today*, October 18, 2019.
- Gleeson, Scott. "Serena Williams Debuts Zebra-Striped Outfit in Bold Fashion Statement at French Open." *USA Today*, May 27, 2019.
- Fendrich, Howard. "Champion, Queen, Goddess, Mother: Serena Wins at French Open." *AP News*, May 27, 2019.

【主要二次資料】

単行図書及び論考

- 阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑—身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』世界思想社、2008年
- 有賀夏紀、小檜山ルイ『アメリカ・ジェンダー史研究入門』青木書店、2010年
- 飯田貴子、井谷恵子『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店、2004年
- 飯田貴子、熊安貴美江、來田享子『よくわかるスポーツとジェンダー』ミネルヴァ書房、2018年
- 井上俊、菊幸一『よくわかるスポーツ文化論』ミネルヴァ書房、2020年
- 井上洋一『「TitleX」が支えるスポーツの男女平等機会』体育史研究第24号、2007年
- 今泉隆祐、大野哲也『スポーツをひらく社会学：歴史・メディア・グローバリゼーション』嵯峨野書院、2019年
- 岩本裕子『物語アメリカ黒人女性史（1619-2013）絶望から希望へ』明石書店、2013年
- レイ・ヴァンプルー、角敦子訳『スポーツの歴史：その成り立ちから文化・社会・政治・ビジネスまで』原書房、2022年
- イザベル・ウィルカーソン、秋元由紀訳『カースト・アメリカに渦巻く不満の根源』岩波書店、2022年

「スポーツと女性の解放：米国女子テニス界と多様性の問題」白井美帆

グレン・M・ウォン、川井圭司『スポーツビジネスの法と文化：アメリカと日本』成文堂、
2012年

江刺正吾『女性スポーツの社会学』不味堂出版、1992年

エリザベス・ウィルソン、野中邦子訳『ラブ・ゲーム テニスの歴史』白水社、2016年

岡田桂、山口理恵子、稲葉佳奈子『スポーツとLGBTQ+』晃洋書房、2022年

小田切毅一『アメリカスポーツの文化史：現代スポーツの底流』不味堂出版、1982年

風間孝、加治宏基、金敬黙『教養としてのジェンダーと平和』法律文化社、2016年

片岡暁夫『現代アメリカスポーツ史』不味堂出版、1980年

生島淳『大国アメリカはスポーツで動く』新潮社、2008年

ビリー・ジーン・キング、中野圭二訳『センターコートの女王』新潮文庫、1983年

国広陽子『メディアとジェンダー』勁草書房、2012年

栗原涼子『アメリカのフェミニズム運動史』彩流社、2018年

マーシア・コーエン、森泉弘次訳『世界を変えた女性たち：現代アメリカ・フェミニズム
史』誠信書房、1996年

シャーウィン裕子『女たちのアメリカ：フェミニズムは何を変えたか』講談社、1991年

メアリー・ジャコーパス『ボディ・ポリティクスー女と科学言説』世界思想社、2003年

杉野健太郎、稲垣伸一『アメリカ文化入門』三修社、2023年

鈴木透『スポーツ国家アメリカ 民主主義と巨大ビジネスのはざままで』中公新書、

2018年

鈴木守、山本理人『講座現代文化としてのスポーツ』道和書院、2000年

ジョージ・H・セージ、深澤宏訳『アメリカスポーツと社会：批判的洞察』不味堂出版、

1997年

田中東子『メディア文化とジェンダーの政治学：第3波フェミニズムの視点から』世界思
想史、2012年

谷口雅子『スポーツする身体とジェンダー』青弓社、2007年

西山哲郎『近代スポーツ文化とはなにか』世界思想社、2006年

橋本純一『現代メディアスポーツ論』世界思想史、2002年

藤枝濤子、松野潔子『アメリカのフェミニズム』創元社、1994年

藤永康政、松原宏之『「いま」を考えるアメリカ史』ミネルヴァ書房、2022年

ベル・フックス、大類久恵訳『アメリカ黒人女性とフェミニズム』明石書店、2010年

ベル・フックス、堀田碧訳『フェミニズムはみんなのもの・情熱の政治学』エトセトラブ
ックス、2020年

「スポーツと女性の解放：米国女子テニス界と多様性の問題」 白井美帆

- ベティ・フリーダン、三浦富美子訳『新しい女性の創造』大和書房、2004年
- ニコ・ベズニエ、スーザン・ブラウネル、トーマス・F・カーター、川島浩平、石井昌幸、窪田暁、松岡秀明訳『スポーツ人類学：グローバリゼーションと身体』東久留米：共和国、2020年
- ダイナ・レイミー・ベリー、カリ・ニコール・グロス、兼子歩、坂下史子、土屋和代訳『アメリカ黒人女性史 再解釈のアメリカ史・1』勁草書房、2022年
- ジョン・ホバマン、川島浩平訳『アメリカのスポーツと人種：黒人身体能力の神話と現実』明石書店、2007年
- アン・ホール、飯田貴子、吉川康夫訳『フェミニズム・スポーツ・身体』世界思想社、2001年
- デイビッド・G・マコーム、中房敏朗、ウエイン・ジュリアン訳『スポーツの世界史』ミネルヴァ書房、2023年
- ピルッコ・マルクラ、リチャード・プリングル、千葉直樹訳『スポーツとフーコー：権力、知、自己の変革』晃洋書房、2021年
- 山中良正『アメリカスポーツ史』逍遙書院、1961年
- 吉原令子『アメリカの第二フェミニズム・1960年代から現在まで』ドメス出版、2013年
- 渡辺和子『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社、2003年
- 渡部憲一『身体障害がいとジェンダーにスポーツを読む』高菅出版、2005年

Barber, Terry. "Althea Gibson." Grass Roots Press, 2007.

Bell, Richard C. "A History of Women in Sport Prior to Title IX." The Sports Journal.

Biracree, Tom. *Althea Gibson*. Chelsea House, 1989.

Brown, Ashley. *Serving Herself: The Life and Times of Althea Gibson*. Oxford University Press, 2023.

Carty, Victoria. "Textual Portrayals of Female Athletes: Liberation or Nuanced Forms of Patriarchy?" *Frontiers: A Journal of Women Studies*, vol. 26, no. 2, 2005.

Cahn, Susan. "Coming on Strong: Gender and Sexuality in Twentieth-Century Women's Sports." Free Press, 1994.

Destin, Yven, and Ervin Dyer. "The Legacies of Tennis Champions Althea Gibson, Arthur Ashe, and the Williams Sisters Show the Persistence of America's Race Obstacles." *Race and Social Problems*, vol. 13, no. 3, 26 May 2021, pp. 195–204, doi:10.1007/s12552-021-09334-3.

- Douglas, Delia. "To Be Young, Gifted, Black and Female: A meditation on the cultural politics at play in representations of Venus and Serena Williams." *Sociology of Sport Online* 5, 2002.
- Du Bois, W.E.B. "The Souls of Black Folks." A.C. McClurg & Co, 1903.
- Friedan, Betty. "The Feminine Mystique." WW Norton & Co. Inc. 2013.
- Lansbury, Jennifer H. *A Spectacular Leap: Black Women Athletes in Twentieth-Century America*. University of Arkansas Press, 2014.
- Felder, Deborah G. *100 American Women Who Shaped American History*. 2nd ed., Sourcebooks, Incorporated, 2022.
- Gaines, K.K. "Uplifting the race." University of North Carolina Press, 1996.
- Gibson, Althea. "I Always Wanted to Be Somebody." Harpercollins, 1958.
- Gitlin, Marty. *The 100 Greatest American Athletes*. Rowman & Littlefield, 2018.
- McKay, James, and Helen Johnson. "Pornographic Eroticism and Sexual Grotesquerie in Representations of African American Sportswomen." *Social Identities: Journal for the Study of Race, Nation and Culture*, vol. 14, no. 4, 2008, pp. 491–504, <https://doi.org/10.1080/13504630802211985>.
- Meier, Henk Erik, and Mara Konjer. "Is There a Premium for Beauty in Sport Consumption? Evidence from German TV Ratings for Tennis Matches." *European Journal for Sport and Society*, vol. 12, no. 3, Jan. 2015, pp. 309–340, doi:10.1080/16138171.2015.11687968.
- Nelson, Mariah. "The Stronger Women Get, The More Men Love Football: Sexism and the American Culture of Sports." Harcourt Brace & Company, 1994.
- Paule-Koba, Amanda L. "PRESSURE IS A PRIVILEGE: BILLIE JEAN KING, TITLE IX, AND GENDER EQUITY." *Reviews in American History*, vol. 40, no. 4, 2012.
- Smith, Mitzi J. "Paul, Timothy, and the Respectability Politics of Race: A Qomanist Inter(con)textual Reading of Acts 16:1-5." *Religions*, vol 10, no. 3, 2019.
- Stanmyre, Jackie F. "Althea Gibson and Arthur Ashe: Breaking down Tennis's Color Barrier." Cavendish Square, 2016.
- Wamsley, Kevin, B. "The Public Importance of Men and the Importance of Public Men: Sport and Masculinities in 19th Century Canada." *Sport and Gender in Canada*, ed. Paul White and Kevin Young, Oxford University Press, 1999.
- Ware, Susan. "Game, Set, Match: Billie Jean King and the Revolution in Women's Sports." Chapel Hill, North Carolina Scholarship Online, 2014.
- Wright, Joshua. "Be Like Mike?: The Black Athlete's Dilemma." *Spectrum: A Journal on Black Men*, vol. 4, no. 2, 2016, pp. 1–19. *JSTOR*,

<https://doi.org/10.2979/spectrum.4.2.01>.

ウェブサイト (2024年2月現在)

- Amanpour, Christiane, and James Masters. "Billie Jean King: 'Women Have to Stick up for Themselves and Fight.'" *CNN*, Cable News Network, 1 Apr. 2016, www.cnn.com/2016/04/01/sport/womens-equal-pay-soccer-billie-jean-king/index.html. Accessed 29 Jan. 2024.
- Andone, Dakin. "Five Times US Women Athletes Advocated for Equality in Sports." *CNN*, Cable News Network, 8 Mar. 2019, edition.cnn.com/2019/03/08/sport/women-athletes-equality-discrimination/index.html. Accessed 29 Jan. 2024.
- Dyson, Michael Eric. "Race, Post Race." *Los Angeles Times*, 5 Nov. 2008, www.latimes.com/opinion/la-oe-dyson5-2008nov05-story.html. Accessed 04 Feb. 2024.
- Garber, Greg. "Billie Jean King: Title IX Was a Landmark Moment, but More Must Be Done." *Women's Tennis Association*, 23 June 2022, www.wtatennis.com/news/2653801/billie-jean-king-title-ix-was-a-landmark-moment-but-more-must-be-done. Accessed 29 Jan. 2024.
- Livaudais, Stephanie. "50 Years of Title IX: From Billie Jean King to Naomi Osaka, Here's How the Tennis World Is Celebrating." *Tennis.Com*, 25 June 2022, www.tennis.com/baseline/articles/50-years-of-title-ix-from-billie-jean-king-to-naomi-osaka-here-s-how-the-tennis-. Accessed 23 January. 2024.
- Mark, Monica. "Venus and Serena Williams Champion Women's Rights on Africa Tour." *The Guardian*, Guardian News and Media, 31 Oct. 2012, www.theguardian.com/world/2012/oct/31/venus-serena-williams-africa-tour. Accessed 30 Jan. 2024.
- Meyers, Naila-jean. "The Open's Breakthrough of 1973." *The New York Times*, 24 Aug. 2013, www.nytimes.com/2013/08/26/sports/tennis/the-opens-breakthrough-of-1973.html. Accessed 29 Jan. 2024.
- Nast, Condé. "セリーナ・ウィリアムズ / Serena Williams." *Vogue Japan*, www.vogue.co.jp/tag/serena-williams?page=4.
- Simpson, Jake. "'Guys Told Me to Get Lost': Billie Jean King on Playing Tennis before Title IX." *The Atlantic*, Atlantic Media Company, 23 June 2017, www.theatlantic.com/entertainment/archive/2012/06/guys-told-me-to-get-lost-

billie-jean-king-on-playing-tennis-before-title-ix/258684/. Accessed 29 Jan. 2024.

Vognar, Chris. “When Star Black Athletes Consider It Their Duty to Speak up for Social Justice.” *Dallas News*, 1 June 2018,

www.dallasnews.com/opinion/commentary/2018/06/01/when-star-black-athletes-consider-it-their-duty-to-speak-up-for-social-justice/. Accessed 04 Feb. 2024.

“Faces of Black History Althea Gibson: First Black Tennis Player to Compete at Wimbledon.” *Monroe News*, The Monroe News, 13 Feb. 2021,

www.monroenews.com/story/news/history/2021/02/13/first-african-american-tennis-player-compete-u-s-national-championships/6704528002/. Accessed 29 Jan. 2024.

“WTA - Global Tennis Players by Career Prize Money Earnings 2023.” *Statista*, 12 Dec. 2023, www.statista.com/statistics/807745/wta-tennis-players-by-prize-money-earnings/#:~:text=As%20of%20January%202023%2C%20tennis,U.S.%20dollars%20in%20prize%20money. Accessed 05 Feb. 2024.